

日本の平安末期における「入宋僧」裔然の入宋の事蹟

## 日本の平安末期における「入宋僧」裔然の入宋の事蹟

李守愛

日本駒澤大学史学（日本史）博士

## 日本平安末期「入宋僧」裔然之入宋事蹟

李守愛

日本駒澤大學史學（日本史）博士

義守大學教師

### はじめ

日本の留学生・学問僧の中で中国の史籍に名が掲載されている者は極めて稀である。しかし、裔然に関しては『宋史』「日本伝」に裔然に関する記事が豊富に記載されている。このことによっても彼が中日交流史の上に重要な位置を占めていると推測できるのではなかろうか。裔然に関する研究の重要性が研究者によって、云々される所以である。西岡虎之助氏が『歴史地理』（第四十五卷第二号）に「裔然の入宋に就いて」と題する研究を発表された。また、高楠順次郎氏が裔然に関する史料を蒐集されている（『日本仏教全書』「遊方伝叢書」所収）。さらに、木宮之彦氏が『入

### 前言

日本留學生或學問僧中，名留中國史籍者極少。但是，《宋史》中卻詳細記載裔然入宋事蹟。由此可知，裔然在中日交流史上所佔之地位有多重要。此即研究裔然重要性之所在。日本學者西岡虎之助氏在《歷史地理》（第四十五卷第二號）雜誌中發表了〈裔然入宋事蹟〉一文。高楠順次郎氏則蒐集裔然之相關史料載於《日本佛教全書・遊方傳叢書》中。木宮之彦氏更發表了《入宋僧裔然之研究—以其隨身品和輸入品為主》（鹿島出版會，1982年）和「入宋僧裔然之事蹟」

《普門學報》第二十二期

宋僧裔然の研究—主としてその隨身品と将来品』(鹿島出版会、一九八二年)や『日宋文化交流史—主として北宋を中心に』(鹿島出版会一九八七年)等の貴重な研究を發表れた。一九五三年に神戸大学の毛利久博士は、清涼寺釈迦像の胎内納入品を発見した。その中には、「裔然入宋求法巡礼行並瑞像造立記」が収納されていた。「造立記」は裔然の入宋に関するもっとも詳細で、正確な記録であるばかりでなく、この記録によって、多くの事実が明らかになった。裔然に関する研究はすでに尽くされ、検討すべき余地は全く残されていないようにも見えるが、検討の余地のあるいくつかの点について考察してみたい。

彼の事蹟の中で最も重要なことは宋の太宗に謁見した時に、銅器・「本国職員令」・「王代年紀」・鄭氏注(後漢鄭玄の著した『孝經』の注)の『孝經』一卷・唐の太宗の子越王貞の『越王孝經新義第十五』一卷を献じたことである。かれは筆札で太宗の下問に対して、日本の皇室が万世一系にして、臣下も世官・世職であることを誇って伝えたのである。彼によって、平安時代中期における日

(《日本歴史》第133號)、及《日宋文化交流史—以北宋為中心》(鹿島出版會、1987年)等珍貴的研究成果。1953年神戸大學毛利久博士在清涼寺之釋迦像胎内發現了各種「納入品」，其中包括了「裔然入宋求法巡禮行並瑞像造立記」一文。「造立記」是有關裔然入宋之記載中，最詳實和正確之紀錄。而且，此紀錄揭露了許多史實。透過上述史料和學者之研究，裔然入宋之情況似乎已被解明。但是，我認為仍有不足之處，值得更進一步探討。

裔然入宋事蹟中最重要者，乃是在謁見宋太宗時，獻上日本所製之銅器和「本國職員令」、「王代年紀」、鄭氏注《孝經》一卷，和唐太宗之子越王貞所注之《越王孝經新義第十五》一卷等。裔然和太宗筆談時，誇示日本皇室乃「萬世一系」，臣下皆世官、世職。他將日本平安時代中期之文物、風土、

日本の平安末期における「入宋僧」裔然の入宋の事蹟

本の文物、風土や経済の状況の一端が中国に知らされたのである。中国の日本に対する認識が拡大されたといえよう。

その一方で、太宗は裔然に対して、存撫すること甚だ厚く、紫衣を賜い「法濟大師」の号を与えた。このような処遇は頗る異例と言わなければならない。裔然が将来した太宗から賜わった開宝勅版大藏經並びに新訳經二百八十六卷が平安時代における日本の開版事業や仏典研究に及ぼした影響が大きかったである。さらに、彼が将来した梅檀の釈迦瑞像・十六羅漢像とその胎内に収納されていた収納品からは、北宋の雕刻・医学（絹製五臟六腑模型）・絵画等の技術や知識が日本に伝えられたことを物語っているとみてよかろう。その歴史的な背景とその影響を検討する必要があるであろう。

## 一、入宋の背景と動機

寛平六年（894）から、遣唐使の制度が公式に廃止された①。唐が内乱のため衰えたといっても、日本と唐の文化との間にはかなりの差があり、依然と

経済等状況傳達至中國，因此北宋王朝對日本王朝遂有更進一步之認識。

太宗對裔然存撫甚深，賜予裔然「紫衣」及「法濟大師」之號。對外國僧侶而言，此為難得之待遇。太宗並應其所求，賜予開寶勅版大藏經及新譯經二百八十六卷。裔然將大藏經及新譯經二百八十六卷攜回日本，對平安時代之開版事業和佛典之研究之影響深刻。他攜回日本之梅檀釋迦瑞像、胎內之收納品（包括絹製五臟六腑模型）和十六羅漢像等，將北宋雕刻、醫學、繪畫等技術傳抵日本。在此本人欲嘗試探討裔然入宋之歷史背景和其對中日兩國之影響。

## 一、裔然入宋的背景和動機

日本宇多天皇寛平六年（894），遣唐使制度正式廢止①。當時唐朝雖因內亂而逐漸衰敗。但是，唐朝在文化的發展上仍遠優於平安王

《普門學報》第二十二期

して平安貴族たちの大陸文化への憧れには強いものがあつた。天曆十一年（九五七）、菅原文時が呈出した「封事三箇条」②には、

一、請禁奢侈事

右。俗之凋衰。源自奢侈。不塞其源。何救其俗。方今高堂連閣。貴賤共壯其居。麗服美食。貧富共寬其制。官途締交之儲。窮陸海而盡珍。

とある。中央においては、藤原氏をはじめとする有力貴族層が巨大な莊園領主として豪華な生活を送っていたことが記されている。彼らは豪華な生活を満足させるため、まず中国からの舶來品—絹織物・香料・藥品—を欲し、それらなるべく早く、豊富に獲得することを望んでいた。ただ大宰府より送られるものを待つようなことでは我慢できなかったのである。自ら大宰府に使者を派遣し、中国商人の來航を待ち受けて直接にそれを購入した③。

平安貴族は仏教の修法のために、香料・藥品などの異國品を必要とした。これらの異國品が当時のアラビア商人の

朝、平安貴族仍憧憬中國文化。村上天皇天曆十一年（957）菅原文時針對時弊提出之「封事三箇條」中建議②：

一、請禁奢侈事

右。俗之凋衰。源自奢侈。不塞其源。何救其俗。方今高堂連閣。貴賤共壯其居。麗服美食。貧富共寬其制。官途締交之儲。窮陸海而盡珍。

由上文可知，平安朝廷以藤原氏為主的貴族，身兼龐大莊園之領主，生活奢華之狀況。平安貴族為了滿足豪華生活所需，貴族渴望儘速自中國獲得絹織物、香料、藥品等舶來品。甚至因難忍長時期的等待，貴族派遣自己的使者遠至「大宰府」，直接自渡海而來的中國商人處購入所需之用品③。

此外，由於末法思想盛行，平安貴族盛行修行佛法，而法會需要

日本の平安末期における「入宋僧」齋然の入宋の事蹟

活躍によって中国に輸入され、唐物として日本に輸入されたのである。宗教的儀式が盛大になるのと共に、この高価な異国品は続々と輸入された。この時期における貿易を発展させる要素の一つになった④。唐と日本の間の国相互の往来は暫く停止されたが、「民間貿易」が盛んになり、海商の往来は頻繁であった。

九六〇年、趙匡胤が五代の混乱を統一して北宋を建国して、中央集権的文臣官僚支配を基本理念としたがために、宋のもとで文化が開花したのである。また、諸産業が俄かに勃興し、種々の商品が大量に生産されたので、新興支配層の一翼をになう大商人が商品の販路を国内のみでなく、国外にも求めるようになった。経済の発達には交易を促進したから、海外にでるものも増えていった。南海諸国との貿易が著しく発展するに伴い、日本その他海外諸国に渡航する商人も著しく増加するに至った。

希有の発展を遂げた宋は、多くの旅

大量的香料、藥品等舶來品。這些舶來品是由當時活躍於中國的阿拉伯商人輸入中國，再以「唐物」之名輸入日本者。因平安貴族舉行之宗教儀式逐漸盛大，於是香料等舶來品也源源不絕地輸入日本，成為此一時期中日「民間貿易」發展澎勃的因素之一④。唐朝末年唐和日本之間的官方往來雖暫時停止，但是「民間貿易」興盛，海商往來頻繁。

西曆九六〇年建立北宋的太祖趙匡胤採中央集權政策，重用文臣，北宋文化發展鼎盛。此外，由於各種產業勃興，各種商品大量生產，成為新興支配層之一的大商人，不但在國內建立商品販售網路外，並至國外尋求販售點。經濟發達，貿易勃興。隨著與南海諸國間的貿易快速發展，渡航至日本及海外各國的商人也顯著增加。

經濟發展鼎盛的北宋初期，吸

《普門學報》第二十二期

人をひきつけた。北宋百六十余年間に、宋商船の往来は頻繁であった。『日本紀略』・『扶桑略記』・『百練抄』・『宋史』をはじめ当時の公卿の日記・文集・僧伝などによっても、その数は七十回に及んでいる。宋商船の来往は年々絶えることがなかったであろう⑤。

十、十一世紀の東アジアでは、唐末五代の混乱を收拾して中国を再び統一した宋、東北モンゴリアに興起し、長城以南のいわゆる燕雲十六州をも領有した契丹族の遼、新羅に代わって朝鮮半島を統一した高麗の三国が鼎立した。それに、日本は遣唐使の廃止以後、中国と国交がなくなり、日本人の海外渡航を厳しく禁じていた。これら四方国のあいだは政治的に複雑な関係にあったばかりでなく、文化交流の上でも必ずしも順調ではなかった。ただ、当時の四方国に共通したのは仏教がさかえていたことであり、この共通の文化を通じての交流は絶えることなくつづけられていた⑥。

貿易船の往来にともない、多くの日本巡礼僧の渡宋、宋からの帰化僧の渡来が生じた。前者に裔然、弁円、成尋、榮西、などがある。

引了眾多來自各國の旅人。北宋一百六十餘年間，宋商船頻繁往來於宋日之間。根據《日本紀略》、《扶桑略記》、《百練抄》、《宋史》等當時的公卿日記、文集、僧傳、正史等之記載，其次數多達七十次⑤。

十、十一世紀的東亞是收拾唐末五代混亂局面，再度統一中國的北宋，與興起於東北蒙古地區，領有長城以南「燕雲十六州」的契丹族遼國，和打敗新羅而統一朝鮮半島的高麗等三國鼎立的時代。再加上日本自遣唐使廢止之後，嚴禁日本人渡航海外。四國之間不僅在政治、外交上關係複雜，文化的交流也未必順暢。但是，四國的佛教發展均興盛，透過此一共通的文化，彼此之間的交流遂源源不絕⑥。

隨著貿易船的往來，日本「朝聖僧」渡航至宋朝者甚多，歸化於日本的宋僧也不少。前者如裔然、弁圓、成尋、榮西等僧侶即是。無

日本の平安末期における「入宋僧」裔然の入宋の事蹟

論在渡海的手續上，和日本的聯絡上，及提供中國佛教情況上，宋海商都給予入宋僧極大的幫助。

『宋史』及び日本の歴史書の記載によると、北宋百六十年の間、宋の海商が宋と日本の間での往來の回数は七十余回に達した。なかでも、朱仁徳、周文徳、周文裔、陳文祐、孫忠、李充などの海商は頻繁に往來しており、日本人にもよく知られた人物であった⑦。

平安時代の末期に朝廷は一般人の海外への渡航を禁止したが、五台山、天台山などの、中国仏界聖跡地巡礼を志す僧侶にだけは、渡航を許可した。天元五（九八三）年に入宋して、九八六年に帰国した東大寺の裔然（？~1016）や長保五（1003）年に入宋した延暦寺の寂照はいずれも正規に勅許を得て渡航したものであった。北宋百六十余年間における入宋僧の数は、僅かに二十二人である。北宋に最初に渡海し、もっとも著名な人物となったのが裔然である⑧。『元亨釈書』「卷第十六、力遊」⑨には、

釈裔然。居東大寺。學三論。又受密乘於元杲。永觀元年秋入宋。東大寺送書青龍寺。比叡山寄信

依《宋史》及日本史書の記載，朱仁徳、周文徳、周文裔、陳文祐、孫忠、李充等均是頻繁往來於日宋之間，並揚名於日本的宋海商⑦。

日本平安時代末期，朝廷雖然禁止普通人渡航海外，卻允許有志於至五台山、天台山等中國佛界聖地巡禮的僧侶渡宋。天元五年（983）入宋，九八六年返回日本的日本東大寺僧侶裔然（？~1016），和1003年入宋的延暦寺僧寂照，都是得到敕許後入宋的渡宋僧侶。北宋一百六十餘年間，「入宋僧」二十二人中，最早渡海的是裔然⑧。《元亨釋書》卷第十六「力遊」⑨中載曰：

釋裔然。居東大寺。學三論。又受密乘於元杲。永觀元年秋

《普門學報》第二十二期

天台山。然持二書着宋地。太宗太平興國八年也。巡禮勝地。歷觀名師。遂於汴都西華門外啟聖禪院。禮優填第二模像。乃雇佛工張榮。模刻而得之。太宗詔問我皇系曆祚。然答詞評備。君臣稱嘆賜紫衣。辭上五臺。雍熙三年。上台州鄭仁德舡歸。永延元年也。然得大藏五千四十八卷及十六羅漢画像。其優填模像見今在嵯峨清涼院。長和五年卒。

入宋。東大寺送書青龍寺。比叡山寄信天台山。然持二書著宋地。太宗太平興國八年也。巡禮勝地。歷觀名師。遂於汴都西華門外啟聖禪院。禮優填第二模像。乃雇佛工張榮。模刻而得之。太宗詔問我皇系曆祚。然答詞評備。君臣稱嘆賜紫衣。辭上五臺。雍熙三年。上台州鄭仁德舡歸。永延元年也。然得大藏五千四十八卷及十六羅漢畫像。其優填模像見今在嵯峨清涼院。長和五年卒。

とある。裔然是京都の人、幼くして東大寺に入って、専ら梵学を修め、同寺の東南院の觀理について三論宗を、また石山寺の元杲より密乘を学んで、遂に大法師位に進んだ。円融天皇の永觀元年(983)八月一日に入宋し、三年後の一条天皇の寛和二年(986)に帰国し、永延元年(987)三月十七日に法橋に叙せられ、後一条天皇の長和五年三月十五日に示寂した。梅檀仏像の胎内に収納された「義藏裔然結縁手印状」⑩には、

由此記載可知，裔然(938~1016 = 天慶元年~長和五)京都人，幼時入東大寺，就東南院僧侶觀理學三論宗，就石山寺僧侶元杲學密教，後進為大法師。圓融天皇永觀元年(983年)八月一日渡宋。三年後，於一條天皇寛和二年(986)返回日本。永延元年(987)三月十七日敘為法橋。後一條天皇的長和五年三月十五日示寂。裔然自北宋攜回之梅檀佛像胎內所收納之「義藏裔然

日本の平安末期における「入宋僧」裔然の入宋の事蹟

結緣手印狀」⑩載曰：

敬啟 十方三世諸佛菩薩梵釋譜天六神地祇現當  
二世結緣狀  
竊以五道之中難得者人身人身中難具者男根縱得  
男根遇佛法難也縱遇佛法得出家之難也縱雖出家  
為脩學僧難也縱雖脩學住一伽藍難也雖住一處為  
同學難也今裔然等值聖教以知古迴愚心而思今結  
緣於智勝如來說法之場同生於釋迦大師遺教之域  
即其結緣之趣具見于化城品又如經文說世尊即為  
父經法即為母同學者兄弟因是而得度因茲義藏等  
近始從今生遠至于菩提結緣同意發菩提滿六度行  
濟五趣生抑義藏等凡夫血肉之身惑業煩惱未除親  
疎難定喜怒易變是以十方三世諸佛國內普天神明  
為證先一期生間曾不變其志設遇惡知識令背乖其  
心常存善知識曾不遠失其罪死生同心寒溫相問若  
年失此結興法之心終共不證無上菩提是故點定愛  
宕山同心合力建立一處之伽藍興隆擇迦之遺法然  
後弟二生必共生兜率內院見佛聞法弟三生共隨從  
弥勒下生間浮聞法得益深增菩薩大悲之心隨願往  
來十方淨土疾證無上正等菩提仍錄現當二世結緣  
狀各持一通將貽將來  
天祿三年歲次壬申閏三月三日巳  
午時東大寺僧義藏  
僧裔然

敬啟 十方三世諸佛菩薩梵釋  
譜天六神地祇現當二世結緣狀  
竊以五道之中難得者人身人身  
中難具者男根縱得男根遇佛法  
難也縱遇佛法得出家之難也縱  
雖出家為修學僧難也縱雖修學  
住一伽藍難也雖住一處為同學  
難也今裔然等值聖教以知古迴  
愚心而思今結緣於智勝如來說  
法之場同生於釋迦大師遺教之  
域即其結緣之趣具見于化城品  
又如經文說世尊即為父經法即  
為母同學者兄弟因是而得度因  
茲義藏等近始從今生遠至于菩  
提結緣同意發菩提滿六度行濟  
五趣生抑義藏等凡夫血肉之身  
惑業煩惱未除親疎難定喜怒易  
變是以十方三世諸佛國內普天  
神明為證先一期生間曾不變其  
志設遇惡知識令背乖其心常存  
善知識曾不遠失其罪死生同心  
寒溫相問若年失此結興法之心  
終共不證無上菩提是故點定愛  
宕山同心合力建立一處之伽藍

(27)

興隆釋迦之遺法然後弟二生必  
共生兜率內院見佛聞法弟三生  
共隨從彌勒下生間浮聞法得益  
深增菩薩大悲之心隨願往來十方  
淨土疾證無上正等菩提仍錄現當  
二世結緣狀各持一通持貽將來  
天祿三年歲次壬申閏三月三日巳  
午時東大寺僧義藏  
僧裔然

とある。天祿三年（972）の三月三日、裔然は、弟子の義藏とともに愛宕山に伽藍を建立して、釈迦の遺法を興隆しようと誓約した。裔然は念願の天台山五台山の巡礼が実現したとき、わざわざこの結縁状を「瑞像」完成の折、他の納入品とともにこれを胎内におさめている。

また、裔然が中国に渡るにあたって、母のために仏事を修しているが、その際の「裔然上人入唐時為母修善願文」を読むと彼が入宋する動機と趣意を知ることができる。天元五年（982）、多くの誹謗反対をおしきり、入宋を志し、報恩のため、母の後生菩提のために、裔然は十齋仏菩薩及び彌勒・文殊・梵天・帝釈

由上文可知，早在圓融天皇天祿三年（972）三月三日，裔然和弟子義藏就發誓，日後將於京都愛宕山建立伽藍。裔然在實現參訪天台山、五台山之宿願，「栴檀瑞像」完成時，遂將「結縁状」和其他納入品同時放入胎內保存。

裔然在渡宋之前，為高齡老母舉行「十講供養說法」法會。由〈裔然上人入唐時為母修善願文〉一文，可深刻瞭解他入宋之動機。天元五年（982）排除眾人的誹謗和反對，立志入宋。為報母恩及母親後生菩提，裔然繪十齋佛菩薩及彌勒

日本の平安末期における「入宋僧」裔然の入宋の事蹟

像各一幅を描き、妙法蓮華經仁王般若經各一部を写して、常住寺において僧侶を請して、五日間にわたり十講供養説法を行った<sup>⑪</sup>。母のために七七日の法要を逆修した時の願文は、彼の意向を受けた慶滋保胤の作である。成立は天元五年（982）七月十三日で、入宋した前年の夏であった。「裔然上人入唐時為母修善願文」によると、裔然が始めて渡海の志を決したのは、円融天皇の天禄以降のことであった。

木宮之彦『入宋僧裔然の研究』<sup>⑫</sup>には、「裔然は前代における入唐僧や南宋の時代に渡海した入宋僧のように、国家群生を利せんがための求法ではなく、自己の罪障消滅のため、後生菩薩のために仏蹟を巡拝するにあった。平安朝時代の後期は、釈迦の滅後すでに千五百年にもなり、世はまさに正法・像法の時期を經過し末法に入ろうとしているときであった。かくてついに永承七年（1052）をもって人々の恐れおののく末法の世の一年目に突入し、所謂末法思想の最全盛のときであった。そして末法の世に生まれあわせ、正法にあい難いというので、僧俗ともにせめて文殊

文殊、梵天、帝釋像各一幅，並書《妙法蓮華經》、《仁王般若經》各一部。請常住寺僧侶連續五天，進行十講供養説法<sup>⑪</sup>。為母逆修七七日法要時之願文由深知其入宋心願的慶滋保胤所書。書於天元五年（982）七月十三日，時值入宋前一年的夏天。依〈裔然上人入唐時為母修善願文〉一文所載，裔然下决心渡海是在圓融天皇天祿年間以後。

依木宮之彦《入宋僧裔然之研究》<sup>⑫</sup>中所書，「裔然和前代の入唐僧及南宋時代渡海入宋僧不同，並非為了國家群生利益求法，是為了消滅自己的罪障及後生菩薩而參訪佛蹟。平安朝時代後期，生值釋迦滅後一千五百年，是正法、像法時期已過，進入末法時期。永承七年（1052）即將來到，也是末法世的第一年，即所謂末法思想最盛之時。因生於末法之世，遭遇正法之時，僧俗均想參訪文殊菩薩常住示現之五台山，欲圖借菩薩文殊之慈悲以消滅罪障，往生阿彌陀世界。

《普門學報》第二十二期

菩薩の常住示現する五台山に巡礼し、報応三身の菩薩文殊である慈悲によって罪障消滅をはかり、阿弥陀の世界に往生しようという希望を抱くようになって来たからである。このように宋国に渡航して、五台山・天台山などの佛教界の聖跡を巡礼することが、当時の僧侶たちにとっては一つのあこがれでもあった」と述べている。

北宋時代の入宋僧の目的は、入唐僧のような求法や勉強ではなくて、その目的は五台山、天台山、天童寺等の、靈山、祖跡の巡礼であった。「裔然上人入唐時為母修善願文」<sup>⑬</sup>には、

天祿以降。有心渡海。本朝久停方貢之使而不遣。  
入唐間待商買之客而得渡。今遇其便。欲遂此志。  
裔然願先參五台山。欲逢文殊之即身。願次詣中  
天筑。欲禮釋迦之遺跡。

宋代には正式な国交がなかったから入宋僧が入宋した時、基本的には出国の申請と許可をするのが必要である。

因此渡航宋國，參訪五台山、天台山等佛教界聖跡是當時僧侶的憧憬之一」。

北宋時代入宋僧入宋之目的和入唐僧不同，不在於求法，在於參訪五台山、天台山、天童寺等靈山、聖跡。〈裔然上人入唐時為母修善願文〉<sup>⑬</sup>中載曰：

天祿以降。有心渡海。本朝久停方貢之使而不遣。入唐間待商買之客而得渡。今遇其便。欲遂此志。裔然願先參五台山。欲逢文殊之即身。願次詣中天筑。欲禮釋迦之遺跡。

宋朝和平安朝廷無正式國交，因此入宋僧入宋時，原則上必須提出出國申請並獲得入宋之許可。宋

日本の平安末期における「入宋僧」裔然の入宋の事蹟

対外的には外交交渉にあたる役所をきちんともうけていた。国際業務を司った役所のなかで市舶司もその一つであった。このほかに、正式な使節を迎える役所や、かれらを宿泊させる宿舎も完備していた。入宋者があれば、こうした機関が連携して対応した。したがって、中国に入った時に、身分証明書や旅行許可書の受給が必要であった。裔然が北宋に入国する時には入国許可、また入国してからも、移動する時に参拝許可を得なければならなかった<sup>⑭</sup>。「入唐諸家伝考第六法濟大師裔然伝考」<sup>⑮</sup>には、

朝並設有對外的交渉機構。市舶司是司掌國際事務的機構之一。此外並設有正式地歡迎使節的機構和完備的住宿設施。入宋者通常由這些機構共同接待應對。外國人進入中國時必須具有身分證明書和旅行許可書。裔然入宋時須具有入國許可。入宋之後，至各地參拜時也須具有參拜許可<sup>⑭</sup>。「入唐諸家傳考第六法濟大師裔然傳考」<sup>⑮</sup>中記載：

東寺紹介狀裔然

(杲寶雜々見聞集二東寺金剛藏藏)

自日本牒唐朝狀事

日本國教王護國寺 牒大唐青龍寺

東大寺傳燈大法師位裔然

牒、往年祖師空海僧正、入朝受法惠果和尚、密教東流以來、殆垂二百載矣、我朝入覲久絕、書信難通、蒼海已隔、雖為一天之參商、白法是同、寧非八代之弟子、今件裔然、遙赴大方、慕禮聖跡、潢汗之潤、顧鼈波而巳朝、燭火之光、望鳥景而不息、期於必遂、理不可奪氣也、察狀慰萬里泣岐之心、令得五臺指南之便、謹牒、

東寺紹介狀裔然

(杲寶雜雜見聞集二東寺金剛藏藏)

自日本牒唐朝狀事

日本國教王護國寺 牒大唐青龍寺

東大寺傳燈大法師位裔然

牒、往年祖師空海僧正、入朝受法惠果和尚、密教東流以來、殆垂二百載矣、我朝入覲久絕、書信難通、蒼海已隔、雖為一天之參商、白法是同、

《普門學報》第二十二期

天元四年 月 日

寧非八代之弟子、今伴裔然、  
遙赴大方、慕禮聖跡、潢汗之  
潤、願鬘波而已朝、燭火之  
光、望鳥景而不息、期於必  
遂、理不可奪氣也、察狀慰萬  
里泣岐之心、令得五臺指南之  
便、謹牒、

天元四年 月 日

とある。また、「入唐諸家傳考第六法濟  
大師裔然傳考」⑩には、

此外，「入唐諸家傳考第六法濟大  
師裔然傳考」⑩中記載：

叡山紹介狀

(同上)

日本國延曆寺 牒大唐天台山國清寺

東大寺傳燈大法師位裔然

牒 得裔然陳狀稱、十餘年間有心渡海、蓋歷觀  
名山巡禮聖跡也、嗟乎日斯邁月斯征、壯齒不居、  
懇志難遂、適逢商客將歸艗、裔然鄉土非不懷、尚  
寄心於台嶺之月、波浪非不畏、偏任身於清涼之  
雲、往者真如出潢派而赴中天竺、靈仙拋國家而  
住五臺山、縱雖庸流欲逐古塵、伏望垂允容給小  
契、以為行路之遠信者、夫以二方異域、雲水雖  
向一味、同法師資是親、件裔然本學三論、志在  
斗藪、願令萬里之飛篷、付一山之便風、以牒、

天元五年八月十六日

叡山紹介狀

(同上)

日本國延曆寺 牒大唐天台山  
國清寺

東大寺傳燈大法師位裔然

牒 得裔然陳狀稱、十餘年間  
有心渡海、蓋歷觀名山巡禮聖  
跡也、嗟乎日斯邁月斯征、壯  
齒不居、懇志難遂、適逢商客  
將歸艗、裔然鄉土非不懷、尚  
寄心於台嶺之月、波浪非不  
畏、偏任身於清涼之雲、往者  
真如出潢派而赴中天竺、靈仙

日本の平安末期における「入宋僧」裔然の入宋の事蹟

都維那傳燈法師位

拋國家而住五臺山、縱雖庸流  
欲逐古塵、伏望垂允容給小  
契、以為行路之遠信者、夫以  
二方異域、雲水雖向一味、同  
法師資是親、件裔然本學三  
論、志在斗籥、願令萬里之飛  
篷、付一山之便風、以牒、

天元五年八月十六日

都維那傳燈法師位

とある。天元五年八月十五日に東大寺からは西安の清竜寺に、また同年同月の十六日に延暦寺からは天台山国清寺に入宋の牒を送った。東大寺から清竜寺に送った牒は、東寺より清竜寺に宛てた紹介状である。東寺と青竜寺の間には極めて密接な関係があったのである。両寺は日本と中国の真言密教の代表的な大道場であった<sup>⑰</sup>。

天元五年十一月、裔然の入宋に際して、人びとは餞別詩歌を詠じた。慶滋保胤「仲冬餞裔上人赴唐同賦贈以言各分一字（探得輕字）」<sup>⑱</sup>には、

由上文可知，圓融天皇天元五年（982）八月十五日，東大寺致牒西安清龍寺，同年同月十六日延暦寺致牒天台山國清寺。東大寺致清龍寺之牒是由其下所屬之東寺所發。東寺和青龍寺之間關係極為密切。兩寺均是日本和中國真言密教的代表性大道場<sup>⑰</sup>。

天元五年（982）十一月裔然入宋之際，親友為他餞別。慶滋保胤並為文紀念。「仲冬餞裔上人赴唐同賦贈以言各分一字（探得輕字）」<sup>⑱</sup>中詠曰：

《普門學報》第二十二期

夫人之重別、古今一也、我朝率土之中、遠則一二千里、分手之後、久亦五六餘年、書信夫通、不期鴈足繫帛之秋、歸去無妨、豈俟烏頭變黑之日、及如其臣之別君、子之辭父、猶遺一日三秋之恨、又有牽衣攬淚之悲、何況異域他鄉、天涯煙水、前程不知、雲關露驛、後會不何春風秋月、嗟呼、情思今之遠行、不似吾土之當別、往昔緇素非一、渡海者多矣、聖教未傳、或專誠於求法之年、王法靡監、或委命於入覲之節、如我師、浮雲無蹤、一去一來、靈丹不繫、自東自西、昔仲尼之去周也、仁者相贈言、今上人之赴唐也、親知各露其膽、予是花月之一友、贈此蒟牧之二言、堂有母儀、莫以逗留中天之月室有師跡、莫以偃息五台之雲、聊記斯文、別淚霑紙、云爾、

夫人之重別、古今一也、我朝率土之中、遠則一二千里、分手之後、久亦五六餘年、書信夫通、不期鴈足繫帛之秋、歸去無妨、豈俟烏頭變黑之日、及如其臣之別君、子之辭父、猶遺一日三秋之恨、又有牽衣攬淚之悲、何況異域他鄉、天涯煙水、前程不知、雲關露驛、後會不何春風秋月、嗟呼、情思今之遠行、不似吾土之當別、往昔緇素非一、渡海者多矣、聖教未傳、或專誠於求法之年、王法靡監、或委命於入覲之節、如我師、浮雲無蹤、一去一來、靈丹不繫、自東自西、昔仲尼之去周也、仁者相贈言、今上人之赴唐也、親知各露其膽、予是花月之一友、贈此蒟牧之二言、堂有母儀、莫以逗留中天之月室有師跡、莫以偃息五台之雲、聊記斯文、別淚霑紙、云爾、

とある。喬然の渡宋の夢は『新古今和歌集』「卷十、羈旅歌」⑱の記載が 《新古今和歌集》卷第十「羈旅歌」⑱中亦載有喬然自吟之詩歌，道出

よく物語ってくれる。

了裔然渡宋之心願。

## 二、入宋活動

裔然是始めて入宋した日本の僧侶で、彼は宋の太宗の太平興国八年（983）に北宋に入った。太祖の次の太宗は仏教が国を治めるのに役に立つと思っていた。宋の太祖の時代からすでに、仏教に対しては受容の態度を示した。太祖は天下の有徳の沙門を殿中に招じて、紫衣を賜い、百五十七人を西域に遣わして法を求めさせ、また成都において、始めて大蔵經六千巻を印刷せしめている。

太宗は北宋を統治していた期間（976~997）に、積極的に仏教を振興し、仏・道二教をはじめとする宗教教団はほぼ完全に国家権力に組み入れられてしまった。彼は天下の童子を度すること十七万人に及び、訳經院を建て、歴大な仏典を漢文に翻訳させて、印刷の印經院を建てて、經典の普及を計った。しかも帝自ら菩薩戒を受け、宮中に道場を設けて常に供奉僧を置いた<sup>⑳</sup>。首都の汴京における重要な寺院（開宝寺、太平興国寺など）が殆ど太宗の時代に建設されたのである。

## 二、裔然の入宋活動

裔然是第一位入宋的日本僧侶。他於宋太宗太平興國八年（983）入北宋。繼宋太祖之後即位的宋太宗認為佛教有助於治國。宋太祖時即對佛教採取寬容的政策，曾招天下有徳之沙門於殿中，賜予「紫衣」。派遣一百五十七人至西域求法。並下令於成都印刷大藏經六千卷。

太宗統治北宋期間（976~997），積極振興佛教。以佛、道二教為始的教團幾乎完全為國家所掌控。宋太宗曾度童子十七萬人。並建立譯經院，令之將龐大的佛典翻譯成漢文。並建立印經院以普及佛教經典。太宗也曾受菩薩戒，於宮中設道場<sup>⑳</sup>。首都汴京的重要寺院（如開寶寺、太平興國寺等）幾乎都是太宗時代所建。

《普門學報》第二十二期

太宗即位の翌年（977）から、西域の使節、僧侶が途絶えずに北宋に入ってきたから、彼は異国の僧侶たちを優遇した。太宗は東西仏教の交流を促進し、都の汴京を仏教の中心として建設した。北宋の士大夫と庶民階層が仏教を深く信仰していたことと北宋の仏教文化が飛躍的に発展できたのは、宋の太宗が重要な役割を演じていた。裔然（えに）は東大寺の僧侶として、当時の平安貴族と関係が深いので、彼を通じて宋の朝廷が日本の朝廷と友好な関係を結びたいと思ったのである。そのような背景があったので、裔然の在宋中における行動は太宗から頗る優遇を受けて、順調に願望を達成できたのである。『參天臺五臺山記』熙寧五年十月条<sup>①</sup>には、

十四日、戊子、天晴。辰一点勅使御藥來以筆言示日。（中略）闍梨官符依召進呈。其案文云、（中略）正文進上了。皇太后宮法花經依宣旨進上。六尺髮同依宣旨進上。裔然日記四卷、覺大師巡禮記三卷。依宣旨進上。至巡禮記第四卷隱藏不進上、依思會昌天子惡事也。

太宗即位（977）之後，入宋之西域使節、僧侶絡繹於途。太宗並提供給異國僧侶特殊待遇。促進了東西佛教的交流，首都汴京成為佛教的重鎮。北宋士大夫和庶民階層篤信佛教者甚眾。北宋佛教文化之所以能飛躍發展，太宗可說影響深遠。裔然出身東大寺，與平安貴族來往密切。裔然入宋時，日本朝廷欲透過他，向北宋朝廷示善意。在此背景下，裔然在宋的行動頗受太宗禮遇，並得以順利參訪天台、五臺山。成尋《參天臺五臺山記》熙寧五年十月條<sup>①</sup>載曰：

十四日、戊子、天晴。辰一點敕使御藥來以筆言示日。（中略）闍梨官符依召進呈。其案文云、（中略）正文進上了。皇太后宮法花經依宣旨進上。六尺髮同依宣旨進上。裔然日記四卷、覺大師巡禮記三卷。依宣旨進上。至巡禮記第四卷隱

日本の平安末期における「入宋僧」裔然の入宋の事蹟

藏不進上、依思會昌天子惡事  
也。

とある。延久四年（1072）十月に成尋は宋の神宗への拝謁するに先立ち、宣旨によって成尋は「闍梨官符」、「皇太后法華經」、「六尺髮」を進上したほか、裔然の『日記』は四巻全部進上した。裔然の在宋における行動の記録で、円仁の『入唐求法巡礼行記』や成尋の『參天臺五臺山記』のように、在宋中の日記四巻<sup>22</sup>があったが、今日伝わっていない。裔然の在宋中の行動は円仁や成尋の様子からある程度うかがうことができる。現存の史料の中では、『宋史』「日本伝」がもっとも詳しいのであるが、裔然の具体的な活動は伝わってこない。そこで、裔然の入宋活動については様々な史料を網羅し傍証する必要がある。大体の様相は理解できるが、いまだ、その証拠が不十分であった。しかし1953年に清涼寺釈迦像の胎内納入品を発見したあと、多くの事実が明らかになった。次に裔然の在宋における行動を述べてみよう。

『東大寺雜集錄』卷八、「嵯峨ノ釈迦傳來之事」<sup>23</sup>には、

根據此文之記載可知，白河天皇延久四年（1072）十月，成尋朝覲宋神宗時，獻上「闍梨官符」、「皇太后法華經」、「六尺髮」之外，並曾獻上裔然所之日記四卷<sup>22</sup>。裔然和「入唐僧」圓仁（《入唐求法巡禮行記》），及「入宋僧」成尋（《參天臺五臺山記》）一樣，以日記記錄了在宋的活動，但已失傳。裔然在宋中的活動，現存史料中以《宋史》所載最為詳細。但仍未能充分了解裔然在宋的具體活動為何？因此，有關裔然の入宋活動，需網羅各種史料以傍証。但佐證之資料依然不足。但是，1953年於清涼寺釋迦像胎內發現各種「納入品」後，他在北宋的活動狀況得更加充分瞭解。

《東大寺雜集錄》卷八「嵯峨釋迦傳來之事」<sup>23</sup>載曰：

《普門學報》第二十二期

爰東大寺ノ裔然上人。仁皇第六十四代円融院ノ御宇。天元五年（壬午）蒙宣旨向太宰府。永觀元年（癸未）八月一日。本朝ノ岸ヲ離レテ。同十八日。台州ノ浦ニ著ク。

爰東大寺裔然上人。仁皇第六十四代円融院御宇。天元五年（壬午）蒙宣旨向太宰府。永觀元年（癸未）八月一日。離本朝之岸。同十八日。著台州之浦。

とある。裔然が四十六才の時に京都を離れて太宰府に行ったのは円融天皇の天元五年（982）の暮のことであろう。また、「和州東大寺沙門裔然傳」<sup>②④</sup>には、

由此可知円融天皇天元五年（982）之暮，裔然四十六歲時，離開京都前往太宰府。此外，「和州東大寺沙門裔然傳」<sup>②④</sup>亦載曰：

永觀元年秋、率徒六人。跨溟達宋。即太平興國八年也。

永觀元年秋、率徒六人。跨溟達宋。即太平興國八年也。

とある。そして、永觀元年（983）八月一日に弟子の盛算、嘉因、定縁、康成、永祚など六人を連れて九州を離れた。「優填王所造梅檀釈迦瑞像歴記一五台山僧盛算記」<sup>②⑤</sup>には、

永觀元年（983）八月一日裔然率弟子盛算、嘉因、定縁、康成、永祚等六人離開九州。「優填王所造梅檀釈迦瑞像歴記一五台山僧盛算記」<sup>②⑤</sup>載曰：

本朝永觀元年八月一日駕吳越商客陳仁爽、徐仁滿等歸船渡海。

本朝永觀元年八月一日駕吳越商客陳仁爽、徐仁滿等歸船渡海。

日本の平安末期における「入宋僧」裔然の入宋の事蹟

とある。宋商陳仁爽、徐仁滿とともに入宋した。また、『宋史』卷四百九十一、「列伝第二百五十、外国七」には、

庸熙元年、日本國僧裔然與其徒五六人浮海而至。

とある。『東大寺雜集錄』卷八、「嵯峨ノ釈迦傳來之事」<sup>②6</sup>には、

永觀元年(癸未)八月一日ニ。本朝ノ岸ヲ離レテ。同十八日。台州ノ浦ニ著ク。

とある。裔然は永觀元(983)年の八月十八日に台州に上陸して、開元寺におちついた。台州は浙江省の東部にある都市であり、今の臨海県である。古くは揚州の地域である。台州は宋代の重要な造船所の一つであった。台州は天台に因んで名づけられたのである。最澄をはじめ多くの入唐僧・入宋僧たちも天台山を参拝した際、台州官府との手

裔然一行人是搭乘宋商陳仁爽、徐仁滿之船入宋。《宋史》卷四百九十一「列傳第二百五十，外國七」載曰：

庸熙元年、日本國僧裔然與其徒五六人浮海而至。

《東大寺雜集錄》卷八「嵯峨釋迦傳來之事」<sup>②6</sup>載曰：

永觀元年(癸未)八月一日。離本朝之岸。同十八日。著台州之。

裔然於永觀元(983)年八月十八日於台州登陸，投宿於開元寺。台州是位於浙江省東部(今臨海縣)，古屬揚州之域，是宋代重要的造船所之一，因天台所在故名。以最澄為始的「入唐僧」和「入宋僧」，在參訪天台山之際，在辦理入山手續時須和台州官府接洽。此外，旅行許可證的發行或停留期間的延長

《普門學報》第二十二期

続き上の応酬が多かったはずである。旅行の許可証を発行したり滞在延長を許可したりする権力が、州の官府にあったからである。『參天臺五臺山記』、卷一、熙寧五年五月二十六日の条<sup>⑳</sup>には、

二十六日、寺主、禹珪、陳詠諸共乘轎出寺、先向天台県。謁知県、問寂照入唐年記、答日六十一年。次問齋然入唐、答八十一年。

と記載により、齋然と寂照が天台県官府と関りを持っていたことが明らかとなった。台州官府との関りもあつたと推測される。齋然は永觀元年（983）九月九日天台山に向かい、一ヶ月ぐらい滞在した。入宋僧の目指した天台山は、智顛の開いた天台宗の根本道場であり、天台山は日本仏教にとって、中国の仏教靈地の中でも他の諸山とは比較にならないほど密接である。伝教大師最澄を始めとし、智証大師円珍も入山した。宋代では重源、榮西、成尋などの入宋僧はすべて一度は天台山を訪ね

等、均由台州官府負責。《參天臺五臺山記》卷一、熙寧五年五月二十六日條<sup>㉑</sup>載曰：

二十六日、寺主、禹珪、陳詠諸共乘轎出寺、先向天台縣。謁知縣、問寂照入唐年記、答日六十一年。次問齋然入唐、答八十一年。

由此可知，齋然和寂照均曾和天台縣官府接洽。齋然於永觀元年（983）九月九日出發前往天台山，於天台山停留一個月左右。入宋僧參尋目標的天台山是智顛所開創之天台宗的根本道場。天台山對日本佛教而言，和其他諸山相較之下，是中國佛教聖地中關係最為緊密者。傳教大師最澄和智証大師圓珍均曾入山。至宋代，重源、榮西、成尋等入宋僧均曾參尋過天台山。《遊方傳叢書第四》「入唐諸家傳考

日本の平安末期における「入宋僧」裔然の入宋の事蹟

ている。「遊方伝叢書第四」「入唐諸家伝考第七盛算伝考」<sup>⑳</sup>には、

抑往代入唐之人、或謁五臺、而不到天台、或口天台、不參五臺。如盛算者、歷二山禮聖跡遇三藏学大教詣師範。

抑往代入唐之人、或謁五臺、而不到天台、或口天台、不參五臺。如盛算者、歷二山禮聖跡遇三藏学大教詣師範。

とある。裔然の弟子の盛算は天台山ばかりでなく、五台山にも参拝したことがある。その記述から同じ行動をした裔然も天台山へ行ったことがあると推測される。また、「入唐諸家伝考第七盛算伝考」「裔然入唐記抄一法華驗記零本」<sup>㉑</sup>には、

裔然之弟子盛算朝訪天台山外、也曾參訪五台山。由此可知、同行的裔然也參訪過天台山。「入唐諸家伝考第七盛算伝考」「裔然入唐記抄一法華驗記零本」<sup>㉑</sup>載曰：

裔然記云。赴天台山國清寺。先禮智者大師真身堂、堂中玄帳之中懸大師真像。像前置小字法華經一部。是大師自出血書經也。入函。云。

裔然記云。赴天台山國清寺。先禮智者大師真身堂、堂中玄帳之中懸大師真像。像前置小字法華經一部。是大師自出血書經也。入函。云。

とある。裔然一行は天台山の国清寺において智者大師の真身堂を礼拝した。

裔然一行曾至天台山國清寺禮拜智者大師之真身堂的年代雖不明，但

《普門學報》第二十二期

齋然と弟子たちが天台山を参拝した年月は明らかではないが、齋然が永觀元年（983）八月一日に入宋し、十月入京の宣旨を蒙るまでの二ヶ月間のことであろう<sup>③〇</sup>。「優填王所造栴檀釈迦瑞像歴記一五台山僧盛算記」には<sup>③①</sup>、

當大宋太平興國八年著彼朝岸。其後至十月蒙宣旨。得台州使入京之間。十一月十八日。到淮南揚州開元寺。安下地藏院。為是禮拜栴檀瑞像也。

とある。齋然は永觀元年十月に至って入京すべき命を蒙り、台州の使者に伴われて、十一月十八日には、揚州の開元寺に到った。地藏院に立ち寄って、栴檀の仏像を礼拝したいと望み、立ち寄ったが、仏像はすでに安置されていなかった。住持に尋ねたところ、宋の太宗によって、汴京の滋福殿に移された後であるという。齋然はその話を聞き、栴檀の像を礼拝したいという願いをいっそう強くしたのだった。

室町時代の書写にかかる東寺三密藏

是據「盛算法師記」所載，大致是永觀元年（983）八月一日至十月蒙宣旨入京的二個月之間<sup>③〇</sup>。「優填王所造栴檀釋迦瑞像歴記一五台山僧盛算記」<sup>③①</sup>載曰：

當大宋太平興國八年著彼朝岸。其後至十月蒙宣旨。得台州使入京之間。十一月十八日。到淮南揚州開元寺。安下地藏院。為是禮拜栴檀瑞像也。

齋然於永觀元年十月奉命入京。在台州使者的陪伴之下於十一月十八日到達揚州開元寺。並曾前往地藏院，希望能禮拜栴檀佛像。齋然由住持處得知，在宋太宗的命令之下佛像已被移往汴京的滋福寺安置後，更增強他禮拜栴檀像之決心。

根據室町時代書寫而保存於東

所蔵の「字類篇零葉山」によると、裔然はまた、唐の僧の鑑真が住持であった龍興寺に詣でている<sup>32</sup>。

揚州は中国古代地理の『禹貢』の中にも書かれている九州の一つである。揚子江北岸近くにあり、豊饒の地利と四通八達の水運とにめぐまれ古くより栄えていた。ここは運河の揚子江と交叉する点に位置し、運河沿岸上の要地として次第に発展し、唐代に至っては揚一と呼ばれて、大運河と駁路によって中国南部の中継地となった。また、国際的にも有数な貿易港として、大食（今日のアラブ諸国）・波斯（今日のイラン）、新羅・日本などからの居留民は何万人にも達したという。鑑真和尚もここから乗船し、日本に渡った<sup>33</sup>。

宋に至って、手工業と商業もさほど盛んでなくなりましたが、東南の中心地としての地位にはかわりはなかった。さらにアラビア人との貿易地で、大都市として重要な位置を占めた。北宋は外国貿易の振興を計り、国家財政の重要な財源にしようと企てた。したがって、産業の一大中心地となった揚子江下流地域は東南海岸の良港に近く、貿易上

寺三密蔵的「字類篇零葉山」所載、裔然也曾造訪唐僧鑑真曾任住持的龍興寺<sup>32</sup>。

據中國古代地理書《禹貢》所載，揚州自古以來是中國九州之一，位於運河和揚子江的交叉點。因地利豐饒水運四通八達，自古繁榮。並因位於運河和揚子江的交叉點，成為運河沿岸的要衝逐漸發展，至唐代時被稱為「揚一」。此外，揚州也是國際有名的貿易港，來自大食（現今之阿拉伯諸國）、波斯（今之伊朗）、新羅、日本等國的移民達數萬人。鑑真和尚也曾自此搭船赴日<sup>33</sup>。

宋朝時期，揚州的手工業和商業發展鼎盛。成為中國東南的重鎮。更是和阿拉伯人貿易的據點，重要的大都市。北宋為了振興對外貿易，以覓國家的財源。因此，產業重鎮的揚子江下流地區，因靠東南海岸之良港，於是在貿易上佔有重要之地位。

重要な地位を占めることになった。

裔然が揚州に入った理由の一つは梅檀の像を礼拝したかったからであった。もう一つは揚州が大運河の交叉点にあったから、汴京に入るのに便利だと思ったのである。「入唐諸家傳考第六法前大師裔然傳考、裔然入唐記抄一覺禪抄金剛界大日尊法一造塔法上」には③④、

十三塔事 祖院安下乃至還寺禮佛佛殿東移。裔然記二云。○到河南道泗州。○寄可普照王六○造益州福成寺八角十三重塔様。云々、裏云。隨聞記云。多寶所乘塔五重十三層。云々。

とある。揚州を離れたあと、裔然は永觀元年十一月十五日に淮南揚州よりさらに北上して河南道の泗州に至ったことがある。それから、応天（南京）③⑤に到着した。「優填王所造梅檀釈迦瑞像歷記一五台山僧盛算記」③⑥には、

十二月十九日到京。二十一日日本僧等入觀皇帝。

裔然進入揚州的原因之一是禮拜梅檀之像。此外，揚州以於大運河交叉點上，入汴京較為便利之故。「入唐諸家傳考第六法前大師裔然傳考、裔然入唐記抄一覺禪抄金剛界大日尊法一造塔法上」③④載曰：

十三塔事。裔然記二云。○到河南道泗州。○寄可普照王六○造益州福成寺八角十三重塔様。云云、裏云。隨聞記云。多寶所乘塔五重十三層。云云。

裔然於永觀元年十一月十五日自揚州北上到達河南道の泗州，其後又前往應天（南京）③⑤。「優填王所造梅檀釈迦瑞像歷記一五台山僧盛算記」③⑥載曰：

十二月十九日到京。二十一日日本僧等入觀皇帝。

日本の平安末期における「入宋僧」裔然の入宋の事蹟

とある。また、「本朝高僧伝卷第六十七和州東大寺沙門裔然傳」<sup>⑳</sup>には、

即太平興國八年也、直抵帝都。

とある。応天より西に行き、汴京（東京）に至り、更に西に行き洛陽（西京）に達した。裔然は永觀元年十二月十九日に東京（汴京）に入り、同二十一日に入内して、崇政殿で太宗に謁見をゆるされた。太宗は裔然を太平興國寺に宿泊させた<sup>㉑</sup>。

東京は即ち汴州にある開封である<sup>㉒</sup>。皇居は洛陽の宮殿をまねて建設されていた。裔然らは宮殿の後ろにある政治を執務していた崇政殿で太宗に謁見した。太宗は裔然の謁見を重視したことがわかる。太平興國寺は太宗が即位から太平興國七年までに完成させた寺院であり、太宗の訳経の計画が行われた場所であった。同寺はもと龍興寺と呼ばれていて、周の世宗の時には、毀仏で官倉になっていたが、宋の太祖開寶二（九六九）年に建て直された。太宗の太平興國二年（九七六）に「太平興國寺」という寺名が下賜された<sup>㉓</sup>。

《本朝高僧傳》卷第六十七「和州東大寺沙門裔然傳」<sup>㉔</sup>載曰：

即太平興國八年也、直抵帝都。

裔然自應天西行達汴京後，再西行前往洛陽，並於永觀元年十二月十九日再入東京（汴京）。太宗於二十一日在處理政事的崇政殿招見裔然，並令宿於太平興國寺<sup>㉕</sup>。

東京即位於汴州之開封<sup>㉖</sup>，其宮城仿洛陽宮建成。裔然能在位於宮殿之後，太宗處理政務的崇政殿謁見太宗，可見太宗對裔然之重視。太平興國寺完成於太宗即位之後的太平興國七年，也是太宗從事譯經計畫之場所。該寺本來稱為龍興寺，周世宗時因毀佛而廢為官倉。至宋太祖開寶二（九六九）年重建。太宗太平興國二年（九七六）被賜予「太平興國寺」之寺名<sup>㉗</sup>。

《普門學報》第二十二期

『仏祖統紀』卷四十三、「宋太宗」太平興國八年條<sup>④</sup>には、

二月北天竺迦濕彌羅國三藏天息災。烏填曩國三藏施護來。召見賜紫衣。敕二師同閱梵夾。時上盛意翻譯。乃詔中使鄭守均。於太平興國寺西建譯經院。為三堂。中為譯經。東序為潤文。西序為證義。

とある。太平興國五年に、天息災と施護が「天竺」から北宋に來た。太宗は詔して、「太平興國寺」に「訳經院」を設立した。訳經院はその機能によって、「訳經三堂」（訳經、証義、潤文）に分けられた。つまり、この寺院は太宗により訳經の計画が進められた中心的な場所であった。のちには藏經を編印する設備と梵学を教授する機能が増えられた。太宗の時代には、太平興國寺の大殿で訳經院を増設し、官立の訳經機構になった<sup>④</sup>。

太平興國寺の位置については、『東京夢華錄』卷三、「大内西右掖門外街」には「大内西去。出街大内西角

《佛祖統紀》卷43「宋太宗」太平興國八年條<sup>④</sup>載曰：

二月北天竺迦濕彌羅國三藏天息災。烏填曩國三藏施護來。召見賜紫衣。敕二師同閱梵夾。時上盛意翻譯。乃詔中使鄭守均。於太平興國寺西建譯經院。為三堂。中為譯經。東序為潤文。西序為證義。

由上文可知，太平興國五年，天息災和施護自「天竺」抵北宋。太宗下詔於「太平興國寺」設立「譯經院」。譯經院依機能之不同分為譯經、証義、潤文之「譯經三堂」。此寺院是太宗實行譯經計畫的重要場所。後來又增加編印藏經之設備和教授梵學等功能。太宗時代，在太平興國寺的大殿增設譯經院，是官立的譯經機構<sup>④</sup>。

至於太平興國之位置，據《東京夢華錄》卷三<sup>④</sup>所載：「大内西

日本の平安末期における「入宋僧」裔然の入宋の事蹟

樓。大街西去躑路街。南太平興國寺後門。北對啓聖院街。」とあるように、内裏の近くにあることがわかる<sup>④③</sup>。裔然が太平興國寺にさら宿泊することが出来たのは頗る殊遇であといえよう。「優填王所造栴檀釈迦瑞像歷記一五台山僧盛算記」<sup>④④</sup>には、

十二月十九日到京。二十一日日本僧等入覲皇帝。即蒙宣旨。與客省承旨行首張萬進。共入左街明聖觀音禪院。得住房安下。明年正月中蒙聖旨。巡禮京大小寺院之後。經奏聞。與張行首共參入滋福殿。大師并一行人禮拜瑞像。

とある。裔然の一行は宣旨を蒙って、客省の張行首に案内され、左街明聖觀音禪院に入って、住房を与えられ、また、開宝勅版の大藏經並びに新訳經二百八十六卷をも賜わった。雍熙元年（永觀二年）正月には、宣旨を蒙って京中の大小寺院を巡礼した後、さらに奏聞を経て、張行首と共に滋福殿に入

去。出大内西角樓。大街西去躑路街。南太平興國寺後門。北對啓聖院街。」可知太平興國寺位於内裏附近。裔然可宿於太平興國，可說是難得之待遇。「優填王所造栴檀釈迦瑞像歷記一五台山僧盛算記」<sup>④④</sup>載曰：

十二月十九日到京。二十一日日本僧等入覲皇帝。即蒙宣旨。與客省承旨行首張萬進。共入左街明聖觀音禪院。得住房安下。明年正月中蒙聖旨。巡禮京大小寺院之後。經奏聞。與張行首共參入滋福殿。大師并一行人禮拜瑞像。

由上文可知，裔然一行蒙宣旨在客省張行首之引領下曾入左街明聖觀音禪院，並宿於此。並被賜予開寶勅版大藏經及新譯經二百八十六卷。北宋雍熙元年正月裔然蒙宣旨，於京中大小寺院巡禮後，和張行首一同入滋福殿，禮拜栴檀釈迦

《普門學報》第二十二期

り、念願の梅檀の釈迦像を礼拝することができたのであった。

北宋が成立した後、首都の汴京に佛寺が多数建立されたので、多くの僧侶が汴京に来た。寺院が早いスピードで建てられ、僧侶の活躍が汴京の特色になった。その盛況ぶりは唐時代の長安、洛陽と比べられる。なお、寺院と僧侶の生活が維持できたのはそれを援助する商人が存在からに相違ない。

『仏祖統紀』によると、宋の太宗と『宋高僧伝』の作者の贊寧が滋福殿に礼拝したことがある<sup>④⑤</sup>。仏像と経蔵を内蔵していて、内裏の「内道場」であったという<sup>④⑥</sup>。「優填王所造梅檀釈迦瑞像歴記一五台山僧盛算記」<sup>④⑦</sup>には、

大宋太祖皇帝乾德年中。破偽唐金陵。擣偽主李昱。入京師之日。迎梅檀像。安置東京梁苑城左街開寶寺永安院中供養。大宋第二主今上皇帝。迎入内裏滋福殿。毎日禮拜供養。僧等到京之日。禮拜不難者。

像。

北宋建國之後、首都汴京建有許多佛寺，因而吸引了眾多的僧侶至汴京。寺院快速建成，僧侶活躍，成為汴京的特色。其盛況可與唐朝的長安、洛陽相比擬。寺院和僧侶的生活得以維持，是因為有後援的商人存在之故。

據《佛祖統紀》所載，宋太宗和《宋高僧傳》作者贊寧都曾參訪滋福殿<sup>④⑤</sup>。是北宋王朝內裏的「内道場」<sup>④⑥</sup>。「優填王所造梅檀釋迦瑞像歴記一五台山僧盛算記」<sup>④⑦</sup>載曰：

大宋太祖皇帝乾德年中。破偽唐金陵。擣偽主李昱。入京師之日。迎梅檀像。安置東京梁苑城左街開寶寺永安院中供養。大宋第二主今上皇帝。迎入内裏滋福殿。毎日禮拜供養。僧等到京之日。禮拜不難者。

日本の平安末期における「入宋僧」裔然の入宋の事蹟

とある。宋の太祖が南唐の首都の金陵（今日の南京）を破って、栴檀の像を迎え、東京（汴京）にあるもっとも大きな寺院である開寶寺に安座して、毎日供養した。宋の太宗の時代には内裏の滋福殿に移して、毎日供養した。これらの資料より裔然や盛算等礼拝した仏像は元は揚州の開元寺に置かれた栴檀の像であろう。

裔然は雍熙元年（永觀二年～984）三月十三日に五台山参拝を奏聞して、公憑「公凭」④⑧を賜わり、ついに四月七日五台山に到着し、多年の念願を遂げた④⑨。なお、宋の朝廷は、地方官憲に命じて、途中に食糧を供給した⑤⑩。五台山大華嚴寺を中心に、五十余日間の五台山の聖地巡礼行った。この間に愛宕山に日本の五台山を造る夢はいよいよ具体化した⑤⑪。

五台山は中国の今の山西省五台県の北東部にある。中国の佛教の三大霊場の一つである。文殊菩薩ゆかりの地とされ、清涼寺・金閣寺など多くの寺院が建立された。五台山に詣でた著名な人物は最澄のほかに、奈良興福寺の靈仙、山城安祥寺の慧運、京都禅林寺の宗叡がいた。また、宋代に至っては、裔然、

宋太祖破南唐首都金陵（南京）之後，迎栴檀像，將之安置於東京（汴京）最大的寺院開寶寺，毎日供養。宋太宗時移於内裏滋福殿，毎日供養。由此可知，裔然和盛算等参拜的佛像是原本安置於揚州開元寺的栴檀像。

裔然於雍熙元年（永觀二年～984）三月十三日奏聞参訪五台山，賜公憑（公凭）④⑧後，於四月七日到達五台山④⑨。其間宋朝廷命令地方官員提供給一行人食糧等⑤⑩。裔然等人以五台山大華嚴寺為中心，五十天之間参訪了五台山各地寺院。於是，於愛宕山建造日本五台山的構想逐漸具體化⑤⑪。

五台山位於今山西省五台東北部，是中國佛教三大佛教聖地，被信徒視為文殊菩薩化現之地。清涼寺、金閣寺等寺院均位於五台山。「入唐僧」中参訪過五台山的著名人物除了最澄之外，尚有奈良興福寺的靈仙、山城安祥寺的慧運、京

《普門學報》第二十二期

成尋などがいる。

『仏祖統紀』卷四十三、「宋太宗」太平興國五年條<sup>⑤</sup>には、

正月。敕内侍張廷訓。往代州五臺山造金銅文殊萬菩薩像。奉安於真容院。詔重修五臺十寺。以沙門芳潤為十寺僧正。十寺者。真容。華嚴壽寧。興國。竹林。金閣。法華。祕密。靈境。大賢。五臺山記云。

とある。宋の太宗も太平興國五年正月に内侍張廷訓を勅し、代州五臺山に金銅文殊菩薩像を作らせ、真容院に奉安した。また、詔して、五臺十寺を建て直させた。さらに、太平興國八年に、太原と成都に勅して、銅鐘を鑄て、峨眉山と五臺山に送った<sup>⑤</sup>。

「入唐諸家傳考第六一法濟大師裔然傳考」<sup>⑤</sup>には、

都禪林寺の宗叡等均曾參訪此山。至宋朝時，則有裔然、成尋等。

《佛祖統紀》卷43「宋太宗」太平興國五年條<sup>⑤</sup>載曰：

正月。敕内侍張廷訓。往代州五臺山造金銅文殊萬菩薩像。奉安於真容院。詔重修五臺十寺。以沙門芳潤為十寺僧正。十寺者。真容。華嚴壽寧。興國。竹林。金閣。法華。祕密。靈境。大賢。五臺山記云。

由上文可知，宋太宗於太平興國五年正月敕令内侍張廷訓於五臺山建金銅文殊菩薩像，並安置於真容院。並曾下詔重建五臺十寺。更於太平興國八年敕令太原、成都鑄銅鐘，將之安置於峨眉山、五臺山<sup>⑤</sup>。

裔然之弟子成算於後一條天皇寬仁三年（1019）三月十九日補任阿闍梨時，太政官牒（「入唐諸家傳考第六一法濟大師裔然傳考」）<sup>⑤</sup>中

日本の平安末期における「入宋僧」裔然の入宋の事蹟

載曰：

方今聖算大師者、與裔然共渡海入唐、謁五台山禮文殊之現瑞、遊天台山巡智者之遺跡、到洛陽白馬寺、禮摩騰法蘭初佛法之場、住龍門原拜無長金剛三藏、或真身或墳塔、於東都禁中萬歲主所造釈迦牟尼佛栴檀像、入右街太平國寺、遇中印度那爛陀寺三藏法天、讀受悉曇梵書、從梵學翻經三藏大德賜紫令遵阿闍梨、稟受兩界瑜迦大法及諸尊別法、受灌頂先畢。

方今聖算大師者、與裔然共渡海入唐、謁五台山禮文殊之現瑞、遊天台山巡智者之遺跡、到洛陽白馬寺、禮摩騰法蘭初佛法之場、住龍門原拜無長金剛三藏、或真身或墳塔、於東都禁中萬歲主所造釈迦牟尼佛栴檀像、入右街太平國寺、遇中印度那爛陀寺三藏法天、讀受悉曇梵書、從梵學翻經三藏大德賜紫令遵阿闍梨、稟受兩界瑜迦大法及諸尊別法、受灌頂先畢。

とある。入宋僧裔然に随従した盛算は後一条天皇の寛仁三年（1019）三月十五日に、阿闍梨に補任されているが、その折の「太政官牒」によれば、盛算は東京（汴京）に至り、五台山に詣でたばかりでなく天台山の智者大師の靈跡を巡拝し、また洛陽白馬寺、迦葉摩騰・竺法蘭の仏教始伝の道場を訪ねた。さらに龍門石窟をも訪ねた。盛算は裔然に随行した弟子であるから、裔然と盛算

由此史料可知，盛算曾至東京（汴京），不只參訪五台山並參訪天台山智者大師之靈蹟。並至伽葉摩騰法、竺法蘭等在中國始傳佛法之道場洛陽白馬寺及洛陽龍門石窟參訪。盛算是裔然隨行之弟子，因此裔然和盛算巡禮之路一致。由此史料可知，裔然曾參訪洛陽和龍門石窟。

《普門學報》第二十二期

の巡礼の経路でもある。この史料によって、裔然が洛陽と龍門石窟に巡礼したことがわかるのである。

雍熙二年二月十八日に、裔然の随行の弟子盛算は明聖観音禪院に泊まり、そこで『開寶寺永安院本』を借りて書写しているが、その識語（山城嵯峨清涼寺所藏）<sup>55</sup>によると、雍熙元年（永観二年）三月には五台山参拝を奏聞して、公憑を賜わり、旅の途次、食糧を供応してもらい、裔然の一行は五臺山に入り、巡礼したあと、諸方の聖跡を巡遊した。永観元年五月二十九日、裔然は五台山を離れ、六月二十四日に汴京に戻った。ついで、東京の太平興国寺においては、印度那爛陀寺三藏法天について悉曇、梵書を学び、さらに梵学翻經三藏大徳賜紫令遵にしたがって、両界瑜伽大法及び諸尊別法を稟受して、灌頂の礼をもらった。かつて礼拝した滋福殿の栴檀像を模刻することを決心した。

法天は太宗の訳経の計画を実現できた重要な担当者の一であった。彼は太平興国五年正月に太宗に呼ばれて東京（開封）に入って、訳経をした<sup>56</sup>。雍熙二年十月に天息災、施護とともに朝請大夫と試鴻臚少卿に賜された<sup>57</sup>。

雍熙二年二月十八日裔然之随行弟子盛算宿於明聖観音禪院，並在此借《開寶寺永安院本》書寫。根據其識語（山城嵯峨清涼寺所藏）<sup>55</sup>，雍熙元年（永観二年）三月，裔然奏聞参拜五台山，賜予公憑。在旅途中官方並供予食糧。裔然一行入五台山，巡禮之後，並参訪諸方聖跡。永観元年五月二十九日裔然一行離開五台山，於六月二十四日返回汴京。之後於太平興国寺就印度那爛陀寺的三藏法天學習悉曇梵書，跟隨「梵學翻經三藏大徳賜紫」令遵阿闍梨稟受兩界瑜伽大法及諸尊別法，並接受灌頂。其時，裔然下決心模刻滋福殿的栴檀像。

法天是太宗實現太宗譯経計畫的重要負責人之一。他於太平興国五年正月被太宗招入東京（開封）從事譯経工作<sup>56</sup>。雍熙二年十月，和天息災、施護同時被賜予朝請大夫

日本の平安末期における「入宋僧」裔然の入宋の事蹟

裔然が天竺の僧侶と接触し、それから直接に悉曇と梵書を教えてもらったことができたことは、交流史の上で特筆すべき意義があると思う。

「優填王所造栴檀釈迦瑞像歴記」によれば、滋福殿の栴檀像は、仏の在世時代に仏が母のために説法に忉利天に上がり、不在になったのを悲しんだ天竺優填王は毘首羯摩という彫刻師に命じて、仏の像を作らせた。その後、弗舎密多という悪王が廃仏を行った際に、鳩摩羅什の父はそれを龜茲国に移した。しかし、前秦王苻堅の時にその将呂光が龜茲国を破って、その像を中国に持帰った。その後転々としながらも、歴代の王室に伝えられ、南唐の都の金陵が宋に敗れたあと、像は太祖が建てた開宝寺永安院に安置された。宋の太宗はそれを内裏の滋福殿内に迎えて祀った<sup>⑤⑧</sup>。

太平興国五年に太宗は勅して、自からの誕生したところ（内裏の西化門に）啓聖禪院を建て、栴檀の像を安置した<sup>⑤⑨</sup>。「優填王所造栴檀釈迦瑞像歴記一五台山僧盛算記」<sup>⑥⑩</sup>には、

夫和試鴻臚少卿<sup>⑤⑦</sup>。裔然得以和天竺僧侶接觸，並直接授予悉曇和梵書，在中西交流史上是具有特殊意義之事。

據「優填王所造栴檀釈迦瑞像歴記」所載，滋福殿之栴檀像是佛陀在世時，為其母說法而上忉利天。天竺優填王悲其不在，遂令彫刻師毘首羯摩塑造佛陀之像，此即為栴檀像。後來弗舎密多廢佛之時，鳩摩羅什之父將之移往龜茲國。前秦王苻堅之屬將軍呂光破龜茲國時，將此像帶回中國，輾轉於歷代王室。南唐都城金陵敗於北宋後，佛像被安置在太祖所建之開寶寺永安院。其後，宋太宗將之迎往內裏滋福殿奉祀<sup>⑤⑧</sup>。

太平興國五年，太宗下敕在自已誕生之處建啟聖禪院，並將栴檀像安置於此<sup>⑤⑨</sup>。「優填王所造栴檀釈迦瑞像歴記一五台山僧盛算記」<sup>⑥⑩</sup>載曰：

《普門學報》第二十二期

巡禮山中之後。巡禮諸方聖迹。其後歸到東京。爰大師有移造此像之心。欲奉造之間。其像移以安置內裏西化門外新造啟聖禪院。院是今上官家捨一百萬貫錢所造也。於是招雇雕刻博士張榮。參彼院奉禮見移造。

巡禮山中之後。巡禮諸方聖迹。其後歸到東京。爰大師有移造此像之心。欲奉造之間。其像移以安置內裏西化門外新造啟聖禪院。院是今上官家捨一百萬貫錢所造也。於是招雇雕刻博士張榮。參彼院奉禮見移造。

とある。裔然は雕刻の博士張榮を招雇して、模刻させた。その像が優填王所造の栴檀釈迦瑞像である。「入瑞像五臟具記捨物」(一卷) ⑥i)には、

根據此一史料所載，裔然招雇雕刻博士張榮模刻栴檀像。但是據「入瑞像五臟具記捨物」(一卷) ⑥i)所載：

雍熙二年八月初七日造像之次、入仏牙於像面、至巳後時仏智出血一点、不知何瑞、衆人咸見、故此記之

雍熙二年八月十八日

法濟大師賜紫 裔然錄  
造像博士 張延皎  
勾当造像僧 居信

雍熙二年八月初七日造像之次、入佛牙於像面、至巳後時佛智出血一點、不知何瑞、眾人咸見、故此記之

雍熙二年八月十八日

法濟大師賜紫 裔然錄  
造像博士 張延皎  
勾當造像僧 居信

日本の平安末期における「入宋僧」裔然の入宋の事蹟

とある。永觀二年五月二十九日、五台山を離れ、汴京に戻って、皇帝に別れを告げ、裔然入宋の年に完成した新版の大藏經五千四十八卷その他の賜与を受けて、翌年六月二十七日台州に帰着する。直ちに瑞像模刻の準備にかかり、香木をもとめ、工匠をつのり、はやくも七月二十一日、造立に着手した。造立の間、裔然は皇帝より下賜された大藏經を転読し、また台州の道俗男女もおおくの施入品を寄せた。瑞像は八月十八日に完成した。さきの『梅檀釈迦瑞像記』によれば梅檀釈迦の模造場所は汴京（開封）であり、さらにその模刻者は雕刻博士張榮であるのに対し、「裔然入宋求法巡礼行並瑞像造立記」には、模刻場所は台州であることが明記されている。従来、瑞像が汴京でつくられたと考えられてきたことが訂正された。

### 三、隨身品と将来物

『宋史』、卷四百九十一、「列伝第二百五十、外国七」<sup>⑥2</sup>には、

裔然於永觀二年五月二十九日離開五台山返回汴京告別宋太宗時，宋太宗賜予裔然剛完成的新版大藏經五千四十八卷。裔然於六月二十七日再度返回台州。並立刻著手準備模刻瑞像。他購入香木，招募工匠，於七月二十一日著手造立。造立期間裔然轉讀宋太宗所賜予之大藏經，台州的道俗男女也奉獻眾多的施入品。瑞像於八月十八日雕刻完成。據前述《梅檀釋迦瑞像記》所載，梅檀釋迦的模造場所は汴京（開封），其模刻者は雕刻博士張榮。但「裔然入宋求法巡禮行並瑞像造立記」中記載，模刻場所は台州。因此，向來認為瑞像造於汴京之說，可說已被推翻。

### 三、裔然攜回日本之中國文物和書籍

《宋史》卷四百九十一「列傳第二百五十，外國七」<sup>⑥2</sup>載曰：

《普門學報》第二十二期

獻銅器十餘事、并本國職員令王代年紀各一卷、裔然衣綠、自云藤原氏、父為真連、其國五品官也、裔然善隸書而不通華言、問其風土但書以對、云國中有五經書及佛經白居易七十卷並得自中國、其國多有中國典籍、裔然之來復得孝經一卷、越王孝經新義第十五卷、皆金鏤紅羅標、水晶為軸、孝經即鄭氏注者、越王者乃唐太宗子越王貞新義者記事參軍任希古等撰也。

獻銅器十餘事、并本國職員令王代年紀各一卷、裔然衣綠、自云藤原氏父為真連、其國五品官也、裔然善隸書而不通華言、問其風土但書以對、云國中有五經書及佛經白居易七十卷並得自中國。其國多有中國典籍，裔然之來復得孝經一卷，越王孝經新義第十五卷，皆金鏤紅羅標，水晶為軸，孝經即鄭氏注者，越王者乃唐太宗子越王貞新義者記事參軍任希古等撰也。

とある。『宋史』と『參天臺五臺山記』<sup>⑥③</sup>によると、裔然は宋の太宗に朝見した時、緑の衣を着ていて、銅製の鈴磬壺等十余種の器具と日本の「職員令」<sup>⑥④</sup>・「王代年紀」おのおの一巻、及び孝經鄭氏註一卷・越王貞の『孝經新義』第十五卷を献上した。裔然は隸書は能く書けたが、中国語は、できなかったようである。日本の風土に対する問に対しては、筆書して答えたこ

據《宋史》及《參天臺五臺山記》<sup>⑥③</sup>所載，裔然覬見宋太宗之時，並獻上銅製鈴磬壺等十餘種器具和日本「職員令」<sup>⑥④</sup>、「王代年紀」各一卷，及《孝經鄭氏註》一卷、越王貞註《孝經新義》一卷。裔然善書但是不能說中文。太宗訊問日本風土情況時，以筆談，日本保存有五經和佛教經典等及《白居易集》，而且均自中國傳抵日本者。

日本の平安末期における「入宋僧」齋然の入宋の事蹟

とが史料よりうかがえる。また、日本に五經の書及び仏教、『白居易集』七十卷、すべて中国から伝えたものであることが記載されている。

孝經は奈良期から広く流布されていて⑥⑤、孔穎達と鄭玄の二人の注が大学・國学に於いて並び行われた⑥⑥。『日本三代実録』卷四、清和天皇貞觀二年十月条⑥⑦には、

十六日壬辰。製。哲王之訓。以孝為基。夫子之言。窮性盡理。即知。一卷孝經。十八篇章。六籍之根源。百王之模範也。然此之間。學令。孔鄭二註為教授正業。厥其學徒相。盛行於世者。安國之注。劉炫之義也。今案。大唐玄宗開元十年。撰御注孝經。作新疏三卷。以為世傳。(中略)。然則孔鄭之注竝廢於時。御注之經獨行於世。而唯傳彼注。(中略)鄭孔二注。即未非真。御注一本。理而當遵行。宜自今以後。立於學官。教授此經。以充試業。

《孝經》在奈良時期就廣為流布⑥⑤。大學和國學同時使用孔穎達和鄭玄二人所註之《孝經》⑥⑥。《日本三代實錄》卷四、清和天皇貞觀二年十月⑥⑦)載曰：

十六日壬辰。製。哲王之訓。以孝為基。夫子之言。窮性盡理。即知。一卷孝經。十八篇章。六籍之根源。百王之模範也。然此之間。學令。孔鄭二註為教授正業。厥其學徒相。盛行於世者。安國之注。劉炫之義也。今案。大唐玄宗開元十年。撰御注孝經。作新疏三卷。以為世傳。(中略)。然則孔鄭之注竝廢於時。御注之經獨行於世。而唯傳彼注。(中略)鄭孔二注。即未非真。御注一本。理而當遵行。宜自今以後。立於學官。教授此經。以充試業。

《普門學報》第二十二期

とある。清和天皇の貞觀年間に至り、日本においては孔鄭二注を黜けて、唐の玄宗の「御注」を採用するようになった。北宋においては唐末五代の戦乱のため典籍が欠逸していることが多かった、これに対し、戦乱の少なかった日本では、比較的多くの典籍が保存されていた。裔然は中国において鄭氏注がすでに失われていることを聞いて、これを携えて北宋に行ったのである。

宋初の蔵書はわずかに一万二千巻にすぎなかった。その後、歴代皇帝が収集につとめた結果、仁宗の慶曆初（1041）年に編纂された『崇文總目』に著録されたものは三万六百六十九巻を数えたが、それでも唐の開元時代における宮廷図書館蔵書の半分にも及ばなかった。歐陽脩は「日本刀歌」<sup>⑥⑧</sup>のなかで、日本には「佚書百篇今尚存、令嚴不許傳中國」と詠じているが、日本に佚書が多いという情報は日本と交易する宋の商人や入宋した日本僧から得ていたのであろう。

裔然は唐の玄宗が鄭玄注の『孝經』を基として作った『御注孝經』を宋の太宗に献上した。彼は戦乱の少ない日

由此可知、清和天皇貞觀年間に、日本罷用孔鄭二注、採用唐玄宗御注本。北宋初期，歷經唐末五代之戰亂，典籍散逸者甚多。相對之下，日本戰亂較少，得以保存較多典籍。裔然得知當時的鄭氏註已散逸，於是攜此經至北宋。

宋初蔵書僅有一萬二千巻左右。其後，經歷代皇帝收集之後，至仁宗慶曆初（1041）年所編纂之《崇文總目》中收録者已達三萬六百六十九巻。但也僅及唐朝開元時期宮廷圖書館蔵書之。歐陽脩所著之〈日本刀歌〉<sup>⑥⑧</sup>中詠曰：日本「佚書百篇今尚存、令嚴不許傳中國」。宋之人士由和日本有貿易關係之宋商和入宋日本僧侶得知，日本仍保存有中國之佚書。

裔然將唐玄宗之《御注孝經》獻予宋太宗，目的大概在於意圖將日本自中國輸入之典籍珍藏，謹守

日本の平安末期における「入宋僧」裔然の入宋の事蹟

本が中国から伝わってきた典籍を大切に保存し、律令国家としての理念を守っている様子を中国の皇帝に伝えたいと思っていたのではないと思われる。さらに『越王孝經新義』についても、中国では亡佚していった。宋は唐末五代之戦乱を経て、典籍の散佚することが甚だしかった。裔然がそれを携えて入宋したことは、日本の文化的水準が中国に劣らないことを誇示しようとしたためといえよう。

十世紀ごろより十一世紀にいたるころまでの日宋間の交通は専ら宋商船の来航による受身的な交通であり、日本の海外往来者は裔然・寂照・成尋ら中国五台山等の聖跡巡礼を志した限られた少数の僧侶達に過ぎなかった。これらの僧侶たちは平安貴族の社会で生活したものであったから、北宋期に入宋した僧侶が宋人たちに語り伝えた日本の風俗・地理・天皇の世系・信仰・学問等は大体貴族社会の知識であったと思われる<sup>69</sup>。

『宋史』、卷四百九十一、「列伝第二百五十、外国七」<sup>70</sup>には、

律令國家理念之印象傳達給中國皇帝。《越王孝經新義》於中國已亡佚。歷經唐末五代之戰亂，宋朝之典籍散佚甚多。裔然攜之入宋，目的在誇示日本之文化水準不亞於中國。

十世紀至十一世紀之間，日宋間的交通主要是靠宋商船的往來航行。日本赴海外者只有裔然、寂照、成尋等以巡禮中國五台山等聖跡為志向的少數僧侶。這些僧侶都與平安貴族社會有密切的關係。因此，北宋期間，入宋僧侶所傳達有關日本的風俗、地理、天皇世系、信仰、學問等，大都是貴族社會的狀況<sup>69</sup>。

《宋史》卷四百九十一、「列傳第二百五十，外國七」<sup>70</sup>載曰：

太宗召見裔然、存撫之甚厚、賜紫衣。

太宗召見裔然、存撫之甚厚、  
賜紫衣。

とある。裔然は宋の太宗より「紫衣」及び「法濟大師」の号を与えられた。宋の時代には、法臘が長くて、徳識が深い僧侶に宋の太宗が紫衣師号を与える制度をつくった。太宗は始めて宋の太祖の時の申請制を受け入れて<sup>⑪</sup>、紫衣を目指す僧侶に三学の試験を受けさせて、それから、開封の功德使がその中から代表者を選んで、経律論のテストを行い、全部パスした者に紫衣を賜った。その後、それに替わって、薦挙制(推挙制)が行なわれた。毎年、皇帝の誕生日に、親王、宰臣、節度使、刺史などは徳行に優れた者を「兩街」に推薦して、それから、「兩街」の僧録が彼らを朝廷に推薦して、宮殿に入らせて、簾の前で師号と紫衣を賜った。それを「簾前紫衣」と呼んだ。僧侶の中で最高の地位とされた<sup>⑫</sup>。

宋の太宗は、中国の仏教の発展に貢献している法天、天息災、施護等の天竺の僧侶にも「紫衣」を下賜した<sup>⑬</sup>。裔然に「紫衣」が与えられたのは彼の中日の文化の交流における貢献に対し

宋太宗賜予裔然「紫衣」及「法濟大師」之號。宋太宗對於僧籍較長、資歷較深的僧侶，採用賜「紫衣」之制加以勉勵。太宗最初採取太祖時期的申請制<sup>⑪</sup>。有志於「紫衣」的僧侶先試經，比試三學，並由開封功德使派代表測試經論律論議十條，全部通過者得賜「紫衣」。後來，則改採薦舉制，由親王、宰臣、節度使、刺史等，每年於皇帝誕辰節推舉徳業高超者至「兩街」。兩街僧録將之推薦入殿，由皇帝賜予簾前師號及「紫衣」，號稱「簾前紫衣」，為僧侶榮譽最高者<sup>⑫</sup>。

宋太宗賜予對中國佛教的發展有重大貢獻的法天、天息災、施護等天竺僧侶「紫衣」<sup>⑬</sup>。宋太宗之所以賜予裔然「紫衣」，目的在於

日本の平安末期における「入宋僧」裔然の入宋の事蹟

て、尊敬の意が表されたことによる。また、宋の朝廷は僧侶の最高の名譽を象徴している紫衣を裔然に下賜したのは北宋と日本の関係を「天子」と「臣子」の関係で表したかったのではないかと考えられる。

『宋史』、卷四百九十一、「列傳第二百五十、外国七」<sup>⑦④</sup>

又求印本大藏、詔亦給之。

とある。裔然は宋の太宗に印本大藏經を求め、これも給された。その一切經（大藏經）は五千四十八卷からなることから明らかなように、膨大な量の仏典を日本に輸入したことになり、しかも摺本とあるように宋時代の印刷本である。今日では宋版と呼ばれる貴重書の将来であった。

宋の時代になって始めて大藏經の印刷が始まった。太宗の崇仏事業として重要なものに、太平興國五年に太宗は中国語が能く理解できた天竺僧天息災、施護、法天を招いて、訳經をさせ、太平興國七年六月に訳經院（後に

感念他對中日文化交流的貢獻。此外，我認為，宋朝廷賜予象徵僧侶最高名譽之紫衣給裔然，目的在於表達北宋和日本之間是「天子」和「臣子」的關係。

《宋史》卷四百九十一「列傳第二百五十，外國七」<sup>⑦④</sup>載曰：

又求印本大藏、詔亦給之。

裔然求印宋太宗之印本大藏經，宋太宗隨之贈予。一切經（大藏經）是由五千四十八卷所組成。此一龐大數量的經典輸入日本是屬摺本的宋時期的印刷本。是被稱之為宋版的貴重經典。

北宋時期開始印刷大藏經，是太宗崇佛事業的重要事業。太平興國五年宋太宗招請精通中文的天竺僧侶天息災、施護、法天等負責譯經工作。太平興國七年六月建立譯經院（後改稱為傳法院）<sup>⑦⑤</sup>，重開

《普門學報》第二十二期

伝法院と改称) を建て<sup>⑦⑤</sup>、唐の元和以後途絶えていた仏典翻訳事業を再開し、翌八年には印經院を置いて<sup>⑦⑥</sup>、成都から送られてきた大藏經版を印刷することをやっている。

雍熙二年、唐代に撰述された『開元録』にもとづいて千七十六部五千四十八卷の大藏經が十二年の歳月をかけて完成した。これが蜀版大藏經または北宋勅版大藏經と呼ばれるものである。宋版大藏經は、版式などから三類に大別することができる。その中には、「開寶藏」とその覆刻本がある。「開寶藏」というのは、宋の太祖が開寶四年(971)に(宦官)張從信を成都に遣わして雕造を命じたものである<sup>⑦⑦</sup>。版本としては、中国最初の大藏經である。

その雕造の経緯から、以前は勅版とか蜀版と呼ばれたが、現在では年号を採って「開寶藏」と称される場合が多い。その雕造が本格的に始まったのは翌五年からで、太宗の太平興國二年(977)には完成していたとみえる。十三万餘枚の版木が成都から都汴京(開封)に運ばれたのは、同八年のことであった<sup>⑦⑧</sup>。送られてきた版木は、新設の印經

唐朝元和年間以後已斷絶の佛典翻譯事業。隔年又置印經院<sup>⑦⑥</sup>，印刷自成都送抵之大藏經版。

雍熙二年，根據唐朝所撰述的《開元録》編纂成的一千零七十六部五千零四十八卷的大藏經，歷經十二年的歳月雕刻完成。此一版本稱為「蜀版大藏經」或「北宋敕版大藏經」。宋版大藏經依版式之不同，可分為三類，包括「開寶藏」和其覆刻本。「開寶藏」是開寶四年(971)宋太祖命令宦官張從信至成都雕造之版本<sup>⑦⑦</sup>，是中國最早雕造的版本大藏經。

以前此一版本被稱之為敕版或蜀版。現在則採其年號，大多稱為「開寶藏」。其雕造時間於開寶五年，太宗太平興國二年(977)完成。太平興國八年十三萬餘枚的版木自成都運至首都汴京<sup>⑦⑧</sup>，並在新設的印經院印刷。裔然謁見太宗時，版木剛運抵開封印刷。於太平

院に置かれて印刷が行われ、また太平興国七年に設置された伝法院（訳経院）での新訳経典などが入蔵されるごとに、それらも印経院で雕印された<sup>79</sup>。

裔然が九八五年に太宗に謁見した頃は、版木が開封に届き、印経院で印刷し始めた頃である。印刷経典が最初に下賜されたのは裔然であった。「開宝蔵」は、日本に下賜されただけではなく、周辺の諸国にも下賜された。特に高麗に対しては、二度三度と下賜された<sup>80</sup>。印刷した大蔵経は国内の大寺院に配られると同時に、外国から来た使節に土産として下賜した背景には、北宋が文化面で飛躍的な発展を遂げ、国家事業として経典を出版できるという国力を誇示するという意図があったものと思われる。

裔然に日本に将来された蜀版の『大蔵経』には開元『大蔵経』以後編入された新訳経が少なかったし、また勅令によって開雕されただけに錯簡や誤字もすくなく、印刷も極めて鮮明であった。当時の仏教研究者は疑問が生じた場合には、まず法成寺の経蔵に至り、裔然将来の開宝版を典拠とすることが多かった。裔然将来の大蔵経が平

興国七年設置的傳法院（譯経院）所新譯的經典入蔵時，均於印経院雕印<sup>79</sup>。

裔然九八五年謁見太宗時，正值版木開封並於印経院印刷之時。印刷完成的經典最先下賜裔然。「開寶蔵」不僅賜給日本並賜予周邊諸國。特別是，曾賜予高麗二、三次<sup>80</sup>。印刷後的大蔵経在賜予國內大寺院的同时，也被當作贈予外國使節的禮物，其目的在於展示北宋在文化層面飛躍發展的情況，及以國家之力出版經典的國力。

裔然攜回日本之「蜀版大蔵経」中，包括「開元大蔵経」完成以後編入的新譯経，而且是敕令開雕之經典，錯簡字和誤字極少，印刷極為鮮明。當時的佛教研究者有疑問時，多先至保存大蔵経的法成寺之経蔵查閱，並以裔然攜回之開寶蔵為依據。裔然攜回之大蔵経，

《普門學報》第二十二期

安末期における写經の底本とされることが多かった。当時の佛典研究に役立ったと思われる。また、奈良朝以来一旦中断した日本の開版事業が裔然の帰朝後間もなく盛んになっている。平安時代の開版事業の発達に強い影響を与えたものと考えられる<sup>⑧1</sup>。裔然の在宋中の有様は、以上のようなものである。

『宋史』卷四百九十一、「列傳第二百五十、外国七」<sup>⑧2</sup>には、

(雍熙)二年条隨台州寧海縣商人鄭仁德船歸其國、後數年仁德還。

とある。彼は在宋およそ三年にして、花山天皇の寛和二年(986)雍熙二年に台州寧海縣(今の浙江)の商人の鄭仁徳の船に乗って、一切經五千四十八卷(新版蜀版)および、新訳經四十一卷をおさめて、五百函を数える蔵經を十六羅漢の画像、並びに優填王の模像とともに日本に持ち帰ったのである。『扶桑略記』、一条天皇上、寛和二年七月条<sup>⑧3</sup>には、

至平安末期時成為寫經之底本。對當時佛典之研究頗有助益。奈良朝以後暫時中斷的日本開版事業，在裔然返日後也興盛起來。對平安時代的開版事業予以相當的影響<sup>⑧1</sup>。裔然在宋之活動如前所述。

《宋史》卷四百九十一「列傳第二百五十，外國七」<sup>⑧2</sup>中載曰：

(雍熙)二年條隨台州寧海縣商人鄭仁德船歸其國、後數年仁德還。

裔然在宋期間約三年。花山天皇寛和二年(986)即北宋雍熙二年時搭乘台州寧海縣(今浙江)商人之鄭仁徳之船返回日本。自北宋攜「一切經」五千四十八卷(新版蜀版)、新譯經四十一卷、十六羅漢之畫像和優填王之模像等返回日本。《扶桑略記》，一條天皇上，寛和二年七月<sup>⑧3</sup>載曰：

日本の平安末期における「入宋僧」裔然の入宋の事蹟

九日、大宰府言大宋國商客鄭仁德來着狀。

九日、大宰府言大宋國商客鄭  
仁德來著狀。

とある。裔然が博多に帰着したのは七月の初めであつたらしく、大宰府は七月九日を以ってこのことを朝廷に言上している。また、『扶桑略記』、一条天皇、寛和二年、八月条<sup>84</sup>には、

由上文可知，裔然返回日本博多時是寛和二年七月初。大宰府於七月九日將此事上告朝廷。《扶桑略記》一條天皇上，寛和二年，八月條<sup>84</sup>載曰：

二十五日。仰大宰府。令歸朝入唐僧裔然等。

二十五日。仰大宰府。令歸朝  
入唐僧裔然等

とある。やがて、八月二十五日、朝廷は大宰府官符を以って彼の帰京を命じたのである。『小右記』永延元年正月条<sup>85</sup>には、

由此可知，八月二十五日朝廷命令裔然返回朝廷所在的京都。《小右記》永延元年正月條<sup>85</sup>載曰：

二十一日、甲申、入唐師裔然昨夕入洛云々、即參攝政殿云々。

二十一日、甲申、入唐師裔然昨  
夕入洛云云、即參攝政殿云云。

とある。彼は十一月七日に上洛の途に

裔然於十一月七日上京，永延元年

《普門學報》第二十二期

上がり、永延元年（987）正月二十一日に入洛した。『小右記』永延元年二月条<sup>⑧</sup>には、

十一日、甲辰、内蔵頭（藤原高遠）、權中將（藤原公任）相共拜見入唐僧裔然畢所隨身佛經、初運置經論於寺給宣旨、運移蓮台寺、山城、河内、攝津等夫持運云々、最初有七寶合成塔、々中籠佛舍利、即載輿中之人担之、誠為結縁、其前雅樂寮發高麗樂、相次担納摺本一切經論之五百合匣、一人担二百匣、道路人相諍担之、最後又有御輿、安置白檀五尺釈迦像、雅樂大唐樂、其次裔然著甲袈裟、七八人僧等相共步行相從、其道自朱雀大路登北、自二条東折、自東大宮大路登北、自一条西折、到蓮台寺云々、人云々、於朱雀門前禮橋下僧二十出来、持高麗、奉讚佛經云々。

（987）正月二十一日入洛（京都）。『小右記』永延元年二月条<sup>⑧</sup>載曰：

二月十一日、甲辰、内蔵頭（藤原高遠）、權中將（藤原公任）相共拜見入唐僧裔然畢所隨身佛經、初運置經論於寺給宣旨、運移蓮台寺、山城、河内、攝津等夫持運云云、最初有七寶合成塔、塔中籠佛舍利、即載輿中之人擔之、誠為結縁、其前雅樂寮發高麗樂、相次擔納摺本一切經論之五百合匣、一人擔二百匣、道路人相諍擔之、最後又有御輿、安置白檀五尺釋迦像、雅樂大唐樂、其次裔然著甲袈裟、七八人僧等相共步行相從、其道自朱雀大路登北、自二條東折、自東大宮大路登北、自一條西折、到蓮台寺云云、人云云、於朱雀門前禮橋下僧二十出來、持高麗、奉讚佛經云云。

日本の平安末期における「入宋僧」裔然の入宋の事蹟

とある。朝廷は特に宣旨を下して、雅樂寮をして音楽を供してこれを迎えしめ、老若男女は貴賤にかかわらずみな裔然に対して礼拝してこれを迎えたという。美しい行列が朱雀大路から蓮台寺まで続いたという。宮中の雅樂寮から樂隊が加わり、摺り本（印刷本）の一切経五百箱、白檀による五尺の釈迦像などが運ばれ、裔然は供の僧に囲まれ、宋皇帝から下賜された紫衣を通肩にまとっていた。『小右記』永延元年二月条<sup>⑧</sup>には、

十六日、己酉、殿上人相率詣蓮台寺、奉拜唐佛經等。  
二十四日、丁巳、右大臣・左大臣兩將軍・他公卿等相率詣蓮台寺。  
二十九日、壬戌、攝政殿今旦被參蓮台寺、被拜唐佛云々。

とある。裔然が京都へ帰ってからは、平安貴族たちは釈迦の瑞像が安置された蓮台寺へ参拝に行くようになった。また、『小右記』の永延元年<sup>⑧</sup>には、

由上文可知，朝廷下旨，由「雅樂寮」奏樂相迎，所到之處，貴賤老幼夾道相迎。行列自朱雀大路綿延至蓮台寺。宮中之雅樂寮亦派樂隊相迎。摺本（印刷本）「一切經」五百箱、白檀製之五尺高的釋迦像被運抵京都。裔然身被宋皇帝下賜之紫衣，供僧熱烈觀迎。《小右記》永延元年二月條<sup>⑧</sup>載曰：

十六日、己酉、殿上人相率詣蓮台寺、奉拜唐佛經等。  
二十四日、丁巳、右大臣、左大臣兩將軍、他公卿等相率詣蓮台寺。  
二十九日、壬戌、攝政殿今旦被參蓮台寺、被拜唐佛云云。

由上文可知，裔然返回京都之後，平安貴族相繼至安置釋迦瑞像的蓮台寺膜拜。《小右記》永延元年<sup>⑧</sup>又載曰：

《普門學報》第二十二期

元月二十四日、丁亥、入唐僧裔然來談、觸事驚耳、不可敢記。

二月二十九日、壬戌、(前略) 裔然師繪像・七寶合成塔等令覽皇太后。

二月二十九日庚辰、又、法橋裔然來。

六月八日、法橋裔然訪來、日及昏不能歸寺、令宿。

元月二十四日、丁亥、入唐僧裔然來談、觸事驚耳、不可敢記。

二月二十九日、壬戌、(前略) 裔然師繪像、七寶合成塔等令覽皇太后

二月二十九日庚辰、又、法橋裔然來

六月八日、法橋裔然訪來、日及昏不能歸寺、令宿

とある。裔然が平安貴族と親交したかわかる。『御堂関白記』寛仁二年正月条<sup>89</sup>には、

十五日、己酉、(中略) 西(栖)霞寺一切經奉渡、是故法橋裔然從唐持渡經也。

とある。裔然是持ち帰った一切經を藤原道長に寄進し、寛仁二年(1018)正月十五日藤原道長は一切經を栖霞寺より二条第に移した。『參天臺五臺山記』、第七、延久五年の三月条<sup>90</sup>には、

由此可知，裔然和平安貴族來往密切。《御堂關白記》寛仁二年(1018)正月條<sup>89</sup>載曰：

十五日、己酉、(中略) 西(栖)霞寺一切經奉渡、是故法橋裔然從唐持渡經也。

裔然攜回之一切經獻予藤原道長。寛仁二年(1018)正月十五日，藤原道長將一切經自栖霞寺移往二条官邸。《參天臺五臺山記》，第

日本の平安末期における「入宋僧」裔然の入宋の事蹟

七、延久五年三月條<sup>90</sup>載曰：

二十三日、傳法院、據日本国延曆寺阿闍梨大雲寺主傳燈大法師位賜紫成尋狀、伏覲聖朝新譯經五百餘卷未傳日本。昨雍熙元年日本僧裔然來朝、蒙大(太)宗皇帝賜号法濟大師。三年還歸、賜大藏經一藏及新譯經二百八十六卷、見在日本法成寺藏内。

二十三日、傳法院、據日本國延曆寺阿闍梨大雲寺主傳燈大法師位賜紫成尋狀、伏覲聖朝新譯經五百餘卷未傳日本。昨雍熙元年日本僧裔然來朝、蒙大(太)宗皇帝賜號法濟大師。三年還歸、賜大藏經一藏及新譯經二百八十六卷、見在日本法成寺藏内。

とある。藤原道長が大藏經を建立した法成寺の經藏に納めた。『參天臺五臺山記』熙寧六(延久五、1073)年三月二十三日の条によると、この頃まで存在していることがわかるが、同寺の重度なる火災で、失われたのであろう。この大藏經は法成寺に納められたときに、近隣の寺院が争って書き写している。その開宝藏から書写したお経が各所に残ったのである。

『宋史』、卷四百九十一、「列傳第二百五十、外國七」<sup>91</sup>には、

由上文可知，後來藤原道長將大藏經收納於法成寺經藏。依《參天臺五臺山記》熙寧六(延久五，1073)年三月二十三日條所載，其時「大藏經」依然保存在法成寺，但因寺院遭回祿之災，大藏經也隨之焚毀。此一大藏經置於法成寺時，附近寺院爭模寫。因此，模寫開寶藏之經文至今然保存於日本各地。

《宋史》卷四百九十一「列傳第二百五十，外國七」<sup>91</sup>載曰：

《普門學報》第二十二期

在彼在斯，只仰皇德之盛，越山越海，敢忘帝念之深，縱粉百年之身，何報一日之惠。染筆拭淚，伸紙搖魂，不勝慕恩之至。謹差上足弟子傳燈大法師位嘉因，并大朝剃頭受戒僧祚乾等拜表以聞，稱其本國永延二年歲次，戊子二月八日，實端拱元年也。又別啓，貢佛經，納青水函，琥珀青紅白水晶紅黑木棹子念珠各一連，並納螺鈿花形平函毛籠一納，螺杯二口，染皮二十枚，金銀蒔繪筥一合、納髮鬘二頭，又一合納參議正四位上藤佐里手書二卷，及進奉物數一卷表狀一卷，又金銀蒔繪硯一、一合納金硯，一鹿毛筆松炯墨，金銅水瓶鐵刀又金銀蒔繪扇筥一合、納檜扇二十枚、蝙蝠扇二枚，螺鈿梳函一對，其一納赤木梳二百七十，其一納龍骨十櫛，螺鈿書案一、螺鈿書几一、金銀蒔繪平筥一合、納白細布五匹、鹿皮籠一、納貌裘一領、螺鈿鞍轡一副、銅鐵鐙紅絲鞞泥障倭畫屏風一雙、石流黃七百斤。

在彼在斯，只仰皇德之盛，越山越海，敢忘帝念之深，縱粉百年之身，何報一日之惠。染筆拭淚，伸紙搖魂，不勝慕恩之至。謹差上足弟子傳燈大法師位嘉因，并大朝剃頭受戒僧祚乾等拜表以聞，稱其本國永延二年歲次，戊子二月八日，實端拱元年也。又別啓，貢佛經，納青水函，琥珀青紅白水晶紅黑木棹子念珠各一連，並納螺鈿花形平函毛籠一納，螺杯二口、染皮二十枚、金銀蒔繪筥一合、納髮鬘二頭、又一合納參議正四位上藤佐里手書二卷、及進奉物數一卷表狀一卷、又金銀蒔繪硯一、一合納金硯、一鹿毛筆松炯墨、金銅水瓶鐵刀又金銀蒔繪扇筥一合、納檜扇二十枚、蝙蝠扇二枚、螺鈿梳函一對、其一納赤木梳二百七十、其一納龍骨十櫛、螺鈿書案一、螺鈿書几一、金銀蒔繪平筥一合、納白細布五匹、鹿皮籠一、納貌裘一領、螺鈿鞍轡一副、銅鐵鐙紅絲鞞泥障倭畫屏風一雙、石

日本の平安末期における「入宋僧」裔然の入宋の事蹟

流黄七百斤。

とある。裔然是帰国した翌々年の永延二年（988）二月には、弟子の嘉因をして宋商の鄭仁徳の帰船に便乗させて、宋の太宗のもとに派遣し宋朝の鴻恩を謝せしめた。

永延元年八月十八日に、奏請して洛北愛太子山（愛宕山）に五台山清涼寺を建立して、将来の釈迦像を安置した。永延三年七月十日には東大寺の五十一代の別当になり<sup>92</sup>、長和五年三月十六日に示寂した。弟子の盛算は彼の志をついで重ねて奏聞して、その西の棲霞寺の釈迦堂を星陵寺と号して、釈迦像を安置した。それが現在の嵯峨の清涼寺である<sup>93</sup>。

由此可知，裔然返回日本後，為報答北宋朝廷之恩，遂遣弟子嘉因等攜帶當時日本出產之貴重品赴北宋獻予北宋朝廷。

永延元年八月十八日，裔然奏請於洛北愛太子山（愛宕山）建五台山清涼寺以安置請來之釋迦像。永延三年七月十日裔然成為東大寺第五十一代的別當<sup>92</sup>。裔然於長和五年三月十六日示寂。弟子盛算為完成他的遺志，多次上奏，後準於位其方建棲霞寺釋迦堂，號星陵寺以安置釋迦像。此即現在的嵯峨清涼寺<sup>93</sup>。

## おわり

一九五三年七月二十九日に神戸大学教授の毛利久博士は、寛和二年（986）七月、裔然が中国（宋）から将来し、いま清涼寺の本尊として祀られていた釈迦如来立像の胎内納入品を発見した。その中には、「裔然入宋求法巡礼行並瑞像

## 結論

一九五三年七月二十九日神戸大學教授毛利久博士發現，寛和二年（986）七月，裔然自中國（宋）攜回，被視為本尊祀於清涼寺的釋迦如来立像胎内有眾多的「納入

《普門學報》第二十二期

造立記一僧鑿端筆」、「入瑞像五臟具記捨物注文一裔然自署」、「義藏裔然結緣手印狀一義藏裔然自署」、「裔然繫念人交名帳」、「銅鏡」、「線刻水月觀音鏡像」、「平絹片」、「五色諸種小片」、「玻璃器」、「菩提念珠」、「水晶珠」、「瑪瑙製耳璫」、「方解石」、「銅製鈴子」、「銅製釧子」、「靈山變相圖」、「彌勒菩薩圖一高文進筆」、「普賢菩薩騎像圖」、「文殊菩薩騎獅圖」、「細字金光明最勝王經一裔然自署」、「裔然生誕書付」、「絹製五臟六腑模型及び背皮」などがある。その中でもっとも重要なものが「裔然入宋求法巡禮行並瑞像造立記」である。「裔然入宋求法巡禮行並瑞像造立記」<sup>94</sup>には、

以癸未歲八月一日離本國其月十八日到台州安著陸行之神速駐跡於開元寺九月九日巡禮天台訪智者之靈蹤遊定光之金地山奇樹秀溪瀆泉澄。渡石梁睹四果之真居登桂嶺觀三賢之膺影(豊千、寒山、拾得) 栖心莫及行役所牽十月八日發離天台

品」。包括「裔然入宋求法巡禮行並瑞像造立記一僧鑿端筆」、「入瑞像五臟具記捨物注文一裔然自署」、「義藏裔然結緣手印狀一義藏裔然自署」、「裔然繫念人交名帳」、「銅鏡」、「線刻水月觀音鏡像」、「平絹片」、「五色諸種小片」、「玻璃器」、「菩提念珠」、「水晶珠」、「瑪瑙製耳璫」、「方解石」、「銅製鈴子」、「銅製釧子」、「靈山變相圖」、「彌勒菩薩圖一高文進筆」、「普賢菩薩騎像圖」、「文殊菩薩騎獅圖」、「細字金光明最勝王經一裔然自署」、「裔然生誕書付」、「絹製五臟六腑模型及背皮」等。其中又以「裔然入宋求法巡禮圖行並瑞像造立記」最為重要。「裔然入宋求法巡禮行並瑞像造立記」<sup>94</sup>中載曰：

以癸未歲八月一日離本國其月十八日到台州安著陸行之神速駐跡於開元寺九月九日巡禮天台訪智者之靈蹤遊定光之金地山奇樹秀溪瀆泉澄渡石梁睹四

日本の平安末期における「入宋僧」裔然の入宋の事蹟

十一日到新昌縣禮南山澄照大師三生所製百尺彌勒石像梵容奇特靈閣巍峩以十二日前經過杭州涉澁數州十一月十五日至泗州普光寺禮大聖十二月十九日到汴京泊于郡亭至廿一日朝覲應運統天睿天英武大聖至明廣孝皇帝於崇政殿奏。

果之真居登桂嶺觀三賢之膺影  
(豐千、寒山、捨得) 栖心莫  
及行役所牽十月八日發離天台  
十一日到新昌縣禮南山澄照大  
師三生所製百尺彌勒石像梵容  
奇特靈閣巍峩以十二日前經過  
杭州涉澁數州十一月十五日至  
泗州普光寺禮大聖十二月十九  
日到汴京泊于郡亭至廿一日  
朝覲  
應運統天睿天英武大聖至明廣  
孝皇帝於崇政殿奏

とある。裔然の入宋、瑞像造立の経過を詳細に記述したものである。記録の末尾部分には、この日瑞像が完成し、五臓を胎内に納入した因縁を述べ、「雍熙二年太歳乙酉八月十八日」の日次と開元寺僧鑿端がこの記録を書いたことを記している。「造立記」は裔然の入宋に関するもっとも詳細で、正確な記録であるばかりでなく、この記録によって、従来、瑞像が汴京で作られたと考えられてきたことが訂正されるなど、多くの事実が明らかになった<sup>95)</sup>。梅檀釈迦瑞像に入れた「入瑞像五臓具記捨物」

此文中詳細記載裔然入宋造立「梅檀瑞像」之経過。記録末尾部分記録了此一瑞像完成之日期及五臓納入胎内之源由,記載曰:「雍熙二年太歳乙酉八月十八日」,由開元寺僧鑿端所書。「造立記」一文是有关裔然入宋事蹟之紀錄中最詳細、正確者。此紀錄更正了向來以為梅檀瑞像是在汴京所雕之記載<sup>95)</sup>。此外,「入瑞像五臓具記捨物」(一卷)末尾載曰,梅檀釋迦瑞像的雕刻師非張榮而是張延皎、張延龔兄

《普門學報》第二十二期

(一卷)の末尾の記載によると、梅檀釈迦瑞像の雕刻師は張榮ではなくて、張延皎と張延襲の兄弟である。造像は七月二十一日にはじめられ、八月十八日に完成した。この間にあたって、裔然是八月一日から、大藏經の転読を発願している。そして、雕刻の作業の進行にあわせて読誦供養をつづけたのであった<sup>96</sup>。

瑞像の胎内に納入した五臓は絹製の出来であり、釈迦の内臓を意味する。内臓は正確な形で生身の正しい位置におかれていたのである。当時の中国人の人体解剖学の正確な知識が理解される。この五臓六腑を前に、さらに造立記・願文・結縁交名記・經典・版画仏・銅錢・鏡・珠・念珠・玻璃器・網袋などの納入物がある。収納された五臓の上におかれた紙片には、今回、この仏が日本へ渡来した。この寺の尼僧や在家の主婦たちで、五臓六腑を縫い上げて、胎内におさめる、という願文が書かれている。その納入品名とその施主名とが列記してある「入瑞像五臓具記捨物注文」<sup>97</sup>によると、この梅檀釈迦像完成の際に、裔然をはじめに開元寺の僧侶八名

弟。並記録造像日期始於七月二十一日，完成於八月十八日。其間，裔然自八月一日起配合雕刻作業之進行持續轉讀大藏經<sup>96</sup>。

梅檀瑞像胎内所放入之絹製五臓，模倣人體内臓作成，可知北宋時期的中國人已具有正確的人體解剖學知識。五臓六腑之前置有造立記、願文、結縁交名記、經典、版畫佛、銅錢、鏡、珠、念珠、玻璃器、網袋等物。五臓之上置有願文曰：「此日，此佛像將渡往日本之國。此寺之尼僧和在家的主婦們，敬謹縫製此五臓六腑，藏於此胎内。」依列記納入品之品名和施主名之「入瑞像五臓具記捨物注文」所載<sup>97</sup>，梅檀釋迦像完成之際，裔然和開元寺僧侶八名及其他信眾，共同將之置於梅檀像之胎内。

日本の平安末期における「入宋僧」裔然の入宋の事蹟

とその他多数の人々が、胎内に寄進したことがわかる。

また、釈迦如来の胎内から「現当二世結縁状」が発見されている<sup>98</sup>。その結縁状から、次のようなことがうかがえる。つまり、その当時、京都には、奈良の仏教寺院の悪弊を感じた革新的な僧侶たちによって山岳仏教が興った。比叡山や高野山における天台・真言の二宗は勃然として栄えた。東大寺の僧侶としての裔然らは深い反省に立って、仏教僧侶としての使命に生きようという決心をしたということである。天禄三年（972）、裔然三十五歳、義藏二十三歳の時、兄弟の盟約を結び、この契を三世に約して、伽藍を愛宕山に建てることを願った誓願文がある。裔然がそれを納入したのは自分の願望は早くからのものであったことを示したかったのであろう。以上、裔然の入宋の活動について述べてきた。

裔然は唐の玄宗が鄭玄注の『孝経』を基として作った『御注孝経』を宋の太宗に献上した。戦乱の少ない日本が中国から伝わってきた典籍を大切に保存していたことを中国の皇帝に伝えたかったのであろう。『越王孝経新義』も、中

此外，由釋迦如來像之胎內更發現了「現當二世結縁状」<sup>98</sup>。由其內容可知，當時京都市的改革派僧侶深感奈良佛教寺院積弊頗深，欲振興山岳佛教。位於比叡山和高野山之天台、真言二宗勃然興榮，身為東大寺僧侶的裔然深刻反省，使命感油然而生。誓願文載曰，天禄三年（972）裔然三十五歳，義藏二十三歳之時，結下了兄弟盟約，並訂下三世之約，發願於愛宕山建立伽藍。裔然之所以將此文置入胎內，是希望願望能早日實現。

裔然將唐玄宗御註之《孝経》獻予宋太宗，特別是《越王孝経新義》已於中國亡佚，目的在於讓中國皇帝了解，戰亂少的日本將傳入日本的中國典籍慎重保存。宋朝歷經唐末五代之戰亂，典籍大多散

国では亡佚した。宋は唐末五代の戦乱を経て、典籍の散佚することが甚だしかったのである。裔然がそれを携えて入宋したことは、日本の文化的水準が中国に劣らないことを誇示しようとしたといえよう。裔然は平安時代中期における日本の文物、風土や経済の状況の一端を中国に伝えたのであるが、彼は平安貴族と親交があり、北宋にうつけたのは平安貴族社会のイメージであると思う。「開寶藏」が、日本に下賜されたのは、北宋が文化の面で飛躍的な発展を遂げ、国家事業としての經典、出版成就することができたという国力を示したかったためと思われる。

宋の太宗が外敵の遼と対抗していた一方で、西域や高麗・日本などとの友好関係を維持したかったために、正式な国交のない日本の僧侶が入宋した時にも、出来るだけ様々な処置を施し、よいイメージを与えようというのが外交政策であったのであろう。その理由によっても、太宗が裔然にたいして、「存撫之甚厚」したのである。「存」と「撫」ともは中国語で「慰める」という意味である。「国王は伝繼し、臣下は皆世官である」(「聞其国王一

佚，而裔然將保存於中國的典籍攜往北宋，目的在於誇示日本的文化水準不輸於中國。裔然將平安時代中期日本的文物、風土和經濟狀況傳至中國。但是由他與平安貴族來往密切一事可知，他傳至北宋的日本風土意像，應是以平安貴族社會之意像為主。「開寶藏」之所以賜予日本，其目的在於展示北宋在文化層面飛躍發展的情況及展示能以國家之力出版經典的國力。

宋太宗在與外敵遼國對抗的同時，又想與西域、高麗、日本等國維持友好的關係。因此，雖與日本無正式國交，但是日本僧侶入宋時提供高規格的接待。欲圖給予良好印象是其外交政策之一。其於此一理由，太宗對裔然「存撫之甚厚」。「存」和「撫」是指「安慰」之意。宋太宗得知「其國王一姓傳繼臣下皆世官」之後雖然欽羨之情溢於言表，但仍意圖表明「大宋

姓伝繼臣下皆世官」)を聞いた太宗が羨望の声を挙げたが、一方では「大宋国」をととしての立場も表したかったのであろう。

『宋史』「日本伝」には、裔然の入宋に関して、実に詳細な記述が見られる。歴代の倭国伝や日本国伝において、個人に関するこれほどの記述は、前後に例を見ない。裔然が中国から一切経、梅檀仏像と十六羅漢図を持ち帰った。日宋間に正式の国交がなかったが、裔然・寂照・成尋ら入宋の僧侶達の活躍は、日本に新たな文化を伝えたのであり、また中国の王朝に日本の情勢を伝えた、国際的知識人の行動として特筆されるべきものであると考える。

## 【註訳】

- ①黑板勝美編集、『本朝文集』、卷第二十八、吉川弘文館、1961年、109頁。
- ②国史大系編修会『本朝文粹』卷第二、吉川弘文館、1965年。

國」之立場。

《宋史》中詳細了裔然入宋之記錄。在中國歷代史書之「倭國傳」和「日本國傳」中，有關個人的記述是未見之例。裔然自中國攜回一切経、梅檀佛像和十六羅漢圖。日宋間雖無正式國交，但是裔然、寂照、成尋等入宋僧活躍將眾多書籍攜回日本，並將中國的狀況傳回日本。擴展日宋交流關係的同時，也記錄了巡禮僧活躍的情況。入宋僧在中國活動的過程中，隱藏了面對大宋國時產生的優劣意識的複雜情緒，及日本平安院政期的對外觀。

## 【註釋】

- ①黑板勝美編集，《本朝文集》卷第二十八（吉川弘文館，1961年）第109頁。
- ②國史大系編修會，《本朝文粹》卷第二（吉川弘文館，1965年）。

《普門學報》第二十二期

- ③秋山謙藏『日支交涉史研究』、岩波書店、1939年、233頁。
- ④上掲註③、305頁。
- ⑤木宮之彦『日宋文化交流史—主として北宋を中心に』、1987年、鹿島出版會、15頁。
- ⑥竺沙雅章『宋元佛教史研究』、汲古書院、2000年、58頁。
- ⑦上掲註③。
- ⑧木宮泰彦『日華文化交流史』、富山房、1987年、286頁。
- ⑨『大日本佛教全書<101冊>』、「日本高僧傳要文抄外四部」、『元亨釋書』「卷第十六、力遊」、名著普及會、1980年、325頁。
- ⑩瀬戸内寂聴、鶴飼光順著『古寺巡礼—京都—清涼寺』、淡交社、1978年、図28。
- ⑪上掲註②、334頁。
- ⑫木宮之彦『入宋僧裔然の研究—主としてその隨身品と将来品—』、鹿島出版會、1982年、25頁。
- ⑬上掲註②、334頁。
- ⑭伊原弘『宋代中国を旅する』、NTT出版、1995年、11頁。
- ⑮大日本佛教全書、<116冊>、「遊方傳叢書第四」、名著普及會、1980年、522頁。
- ③秋山謙藏，《日支交涉史研究》（岩波書店，1939年）第233頁。
- ④同註③，第305頁。
- ⑤木宮之彦，《日宋文化交流史—以北宋為中心》（鹿島出版會，1987年）第15頁。
- ⑥竺沙雅章，《宋元佛教史研究》（汲古書院，2000年）第58頁。
- ⑦同註③。
- ⑧木宮泰彦，《日華文化交流史》（富山房，1987年）第286頁。
- ⑨《大日本佛教全書・日本高僧傳要文抄外四部》101冊，《元亨釋書》卷第十六「力遊」（名著普及會，1980年）第325頁。
- ⑩瀬戸内寂聴，鶴飼光順著，《古寺巡禮—京都—清涼寺》（淡交社，1978年）圖28。
- ⑪同註②，第334頁。
- ⑫木宮之彦，《入宋僧裔然之研究—以隨身品和攜入品為主》（鹿島出版會，1982年）第25頁。
- ⑬同註②，第334頁。
- ⑭伊原弘，《宋代中國之旅》（NTT出版，1995年）第11頁。
- ⑮《大日本佛教全書・遊方傳叢書第四》116冊（名著普及會，1980

日本の平安末期における「入宋僧」裔然の入宋の事蹟

- 年) 第 522 頁。
- ⑩上掲註⑩、522-523頁。
- ⑪西岡虎之助『裔然の入宋に就いて』、『歴史地理』第四十五卷第二号、425頁。
- ⑫上掲註②、卷九。
- ⑬峯村文人訳『新古今和歌集』、小学館、1995年、272頁。
- ⑭『大正大藏經』「仏祖統紀」、卷43。
- ⑮『大日本仏教全書』第115冊、「遊方伝叢書第三」、名著普及会、1980年、385頁。
- ⑯上掲註⑩、425頁。
- ⑰『大日本仏教全書』121冊、「東大寺雜集録」卷八、「嵯峨ノ釈迦傳來之事」1980年、名著普及会、181頁。
- ⑱『大日本仏教全書』103冊、「本朝高僧傳第二」、卷第六十七、名著普及会、847頁。
- ⑲大日本仏教全書<114冊>、遊方伝叢書第二、名著普及会、319頁。
- ⑳上掲註③。
- ㉑上掲註⑩、340頁。
- ㉒上掲註⑩、524頁。
- ⑩同註⑩、第 522~523 頁。
- ⑪西岡虎之助、〈裔然入宋〉、『歴史地理』第四十五卷第二号、第 425 頁。
- ⑫同註②、卷九。
- ⑬峯村文人譯、《新古今和歌集》(小學館、1995年)第 272 頁。
- ⑭《佛祖統紀》卷 43、《大正藏》第四十九冊。
- ⑮《大日本佛教全書・遊方傳叢書第三》115冊(名著普及會、1980年)第 384~385 頁。
- ⑯同註⑩、第 425 頁。
- ⑰《大日本佛教全書・東大寺雜集録》121冊、卷八「嵯峨釋迦傳來之事」(名著普及會、1980年)第 181 頁。
- ⑱《大日本佛教全書・本朝高僧傳第二》103冊、卷第六十七(名著普及會)第 847 頁。
- ⑲《大日本佛教全書》、114冊、「遊方傳叢書第二」(名著普及會)第 319 頁。
- ⑳同註③。
- ㉑同註⑩、第 340 頁。
- ㉒同註⑩、第 524 頁。

《普門學報》第二十二期

- ⑲上掲註⑮、521頁。
- ⑳上掲註⑮、32頁。
- ㉑上掲註⑮。
- ㉒上掲註⑲。
- ㉓陳橋驛編著『中国の諸都市—その生い立ちと現状』大明堂、1990年。
- ㉔上掲註⑮。
- ㉕北宋の四京府は東京の開封府で、西京の河南府で、南京の応天府で、北京の大名府である。
- ㉖上掲註⑮。
- ㉗『大日本仏教全書』103冊、「本朝高僧伝巻第六十七—和州東大寺沙門裔然傳」、名著普及会、847頁。
- ㉘『宋史』「卷四百九十一、列伝第二百五十、外国七」。
- ㉙『宋史』「卷八十五、志第三十八、地理一」（中華書局、2097頁）には、「東京、汴之開封也、梁為東都、後唐罷、晉復為東京、宋因周之旧為都。建隆三年、廣皇城東北隅、命有司畫洛陽宮殿、按圖修之、皇居始壯其麗矣。宮城周邊五里、（中略）宮後有崇政殿、閱事之所也。」とある。
- ㉚上掲註⑲、「宋太宗」。
- ㉛同註⑮、第521頁。
- ㉜同註⑮、第32頁。
- ㉝同註⑮。
- ㉞同註⑲
- ㉟陳橋驛編著，《中國諸都市》（大明堂、1990年）。
- ㊱同註⑮。
- ㊲北宋四京府為東京開封府，西京河南府，南京應天府，北京大名府。
- ㊳同註⑮。
- ㊴《大日本佛教全書・本朝高僧傳第二》103冊，卷第六十七「和州東大寺沙門裔然傳」（名著普及會）第847頁。
- ㊵《宋史》卷四百九十一，列傳第二百五十，外國七。
- ㊶《宋史》卷八十五，志第三十八，地理一（中華書局，2097頁）：「東京，汴之開封也，梁為東都，後唐罷，晉復為東京，宋因周之舊為都。建隆三年，廣皇城東北隅，命有司畫洛陽宮殿，按圖修之，皇居始壯其麗矣。宮城周邊五里，（中略）宮後有崇政殿，閱事之所也。」
- ㊷同註⑲，「宋太宗」。

日本の平安末期における「入宋僧」齋然の入宋の事蹟

- ④①上掲註⑳。
- ④②黃啓江『北宋佛教史稿論』、台灣商務印書局、1997年、38頁。
- ④③孟元老著、入矢義高訳注『東京夢華録』、平凡社、1996年、104頁。
- ④④上掲註㉕。
- ④⑤上掲註㉑。
- ④⑥上掲註㉑。
- ④⑦上掲註㉕。
- ④⑧公憑（凭）とは、官府の証明文書である。宋代において公文書の種類として広く用いられていた。王麗萍『宋代の交流史研究』、勉誠出版、2002年、75頁の「宋代の公凭について」を参考してください。
- ④⑨上掲註㉕。
- ④⑩上掲註㉓。
- ④⑪上掲註⑰。
- ④⑫『仏祖統紀』、卷43、宋太宗の太平興国五年条：「正月。敕内侍張廷訓。往代州五臺山造金銅文殊萬菩薩像。奉安於真容院。詔重修五臺十寺。以沙門芳潤為十寺僧正。十寺者。真容。華嚴壽寧。興國。竹林。金閣。法華。祕密。靈境。大賢。五臺山記云。」
- ④⑬同註㉑。
- ④⑭黃啟江，《北宋佛教史稿論》（台灣商務印書局，1997年）第38頁。
- ④⑮孟元老著，入矢義高譯注《東京夢華錄》（平凡社，1996年）第104頁。
- ④⑯同註㉕。
- ④⑰同註㉑。
- ④⑱同註㉑。
- ④⑲同註㉕。
- ④⑳公憑（凭）是指官府証明文書。宋代公文書之一種。請參考王麗萍，《宋代交流史研究》（勉誠出版社，2002年）第75頁。
- ④㉑同註㉕。
- ④㉒同註㉓。
- ④㉓同註⑰。
- ④㉔《佛祖統紀》，卷43，宋太宗太平興國五年條：「正月。敕内侍張廷訓。往代州五臺山造金銅文殊萬菩薩像。奉安於真容院。詔重修五臺十寺。以沙門芳潤為十寺僧正。十寺者。真容。華嚴壽寧。興國。竹林。金閣。法華。祕密。靈境。大賢。五臺山記云。」

《普門學報》第二十二期

- ⑤③『仏祖統紀』、卷43、宋太宗の太平興國八年條：「六月、敕太原成都鑄銅鐘。賜五臺峨眉名山遣挂之日。兩山皆有梵僧十餘。空中奉迎其鐘。聲聞百里。」
- ⑤④上掲註⑮。
- ⑤⑤上掲註⑮。
- ⑤⑥『仏祖統紀』、卷43、宋太宗の太平興國五年條：「正月、中府沙門法進。請三藏法天譯經於蒲津(蒲州河中府)守臣表進。上覽之大說。召入京師始興譯事。」
- ⑤⑦『宋史』、卷五、本紀第五、太宗二。
- ⑤⑧上掲註⑮。
- ⑤⑨『仏祖統紀』、卷43、宋太宗の太平興國五年條：「詔建開啓聖禪寺於誕生之地。奉優填王旃檀瑞像(梁武帝遣郝騫往天竺迎至者)釋迦佛牙太祖親緘銀塔中(唐宣律師天人所獻)梁誌公真身錫杖刀尺。」
- ⑥⑩上掲註⑮。
- ⑥⑪上掲註⑩、95頁。
- ⑥⑫上掲註⑳。
- ⑥⑬上掲註㉑、425頁。
- ⑥⑭上掲註⑮。
- ⑤③《佛祖統紀》卷43，宋太宗太平興國八年條：「六月，敕太原成都鑄銅鐘。賜五臺峨眉名山遣挂之日。兩山皆有梵僧十餘。空中奉迎其鐘。聲聞百里。」
- ⑤④同註⑮。
- ⑤⑤同註⑮。
- ⑤⑥《佛祖統紀》卷43，宋太宗太平興國五年條：「正月，中府沙門法進。請三藏法天譯經於蒲津(蒲州河中府)守臣表進。上覽之大說。召入京師始興譯事。」
- ⑤⑦《宋史》卷五，本紀第五，太宗二。
- ⑤⑧同註⑮。
- ⑤⑨《佛祖統紀》卷43，宋太宗太平興國五年條：「詔建開啓聖禪寺於誕生之地。奉優填王旃檀瑞像(梁武帝遣郝騫往天竺迎至者)釋迦佛牙太祖親緘銀塔中(唐宣律師天人所獻)梁誌公真身錫杖刀尺。」
- ⑥⑩同註⑮。
- ⑥⑪同註⑩，第95頁。
- ⑥⑫同註⑳。
- ⑥⑬同註㉑，第425頁。
- ⑥⑭同註⑮。

日本の平安末期における「入宋僧」齋然の入宋の事蹟

- ⑥5 『続日本紀』孝謙天皇天平宝字元年の条には、「古者治民安國必以孝理、百行之本莫先於茲、宜令天下家藏孝經一本、精勤誦習倍加發」とある。
- ⑥6 学令には、「凡教授正業（前略）孝經孔安國鄭玄注、」とある。
- ⑥7 『日本三代実録』卷四、清和天皇貞觀二年十月条。
- ⑥8 楊家駱主編『宋詩鈔』「歐陽文忠詩鈔（六十二）」（上冊）、世界書局、1962年。
- ⑥9 森克己「宋より見た日本」（『歴史教育』八卷一号、1960年）。
- ⑦0 上掲註③8。
- ⑦1 『仏祖統紀』卷51、宋太祖開宝二年条：「長春節詔天下沙門。殿試經律論義十條。全中者賜紫衣」
- ⑦2 上掲註④2。
- ⑦3 上掲註②0。
- ⑦4 上掲註③8。
- ⑦5 『宋史』卷四、本紀第四、太宗一。
- ⑦6 『仏祖統紀』卷43、宋太宗の太平興國八年六月条：「詔翰林贊寧修大宋高僧傳、寧乞歸錢唐撰述、詔許之、詔譯經院、賜名傳法、於西偏建印經院（今臨安傳法院）、即東都譯經
- ⑥5 《續日本紀》孝謙天皇天平寶字元年條：「古者治民安國必以孝理，百行之本莫先於茲，宜令天下家藏孝經一本，精勤誦習倍加發。」
- ⑥6 「學令」：「凡教授正業（前略）孝經孔安國鄭玄注。」
- ⑥7 《日本三代實錄》卷四，清和天皇貞觀二年十月條。
- ⑥8 楊家駱主編《宋詩鈔》「歐陽文忠詩鈔（六十二）」（上冊）（世界書局，1962年）。
- ⑥9 森克己，〈由宋觀察日本〉，《歷史教育》八卷一號（1960年）。
- ⑦0 同註③8。
- ⑦1 《佛祖統紀》卷51，宋太祖開寶二年條：「長春節詔天下沙門。殿試經律論義十條。全中者賜紫衣」
- ⑦2 同註④2。
- ⑦3 同註②0。
- ⑦4 同註③8。
- ⑦5 《宋史》卷四，本紀第四，太宗一。
- ⑦6 《佛祖統紀》卷43，宋太宗太平興國八年六月條：「詔翰林贊寧修大宋高僧傳，寧乞歸錢唐撰述，詔許之，詔譯經院，賜名傳

《普門學報》第二十二期

院。」。

⑦⑦上揭註②⑩。

⑦⑧『仏祖統紀』卷43、宋太宗の太平興國八年六月條：「成都先奉太祖敕造大藏經板成進上。」

⑦⑨上揭註④②、337頁。

⑦⑩上揭註④②、271頁。

⑦⑪上揭註①⑦、305頁。

⑦⑫上揭註③⑧。

⑦⑬『扶桑略記』、一條天皇上、寬和二年七月條。

⑦⑭上揭註③⑧、寬和二年八月條。

⑦⑮『小右記』永延元年正月條。

⑦⑯上揭註③⑤永延元年二月條。

⑦⑰上揭註③⑤永延元年二月條。

⑦⑱上揭註③⑤永延元年正月條。

⑦⑲『御堂閔白記』寬仁二年正月條。

⑦⑳上揭註②①。

⑦㉑上揭註③⑧。

⑦㉒大日本仏教全書『東大寺叢書第一』「東大寺別當次第」、名著普及會、1980年、427頁。

⑦㉓大日本仏教全書(150冊)、『塵添瑤囊鈔』、卷

法，於西偏建印經院(今臨安傳法院)，即東都譯經院。」

⑦⑦同註②⑩。

⑦⑧《佛祖統紀》卷43，宋太宗太平興國八年六月條：「成都先奉太祖敕造大藏經板成進上。」

⑦⑨同註④②，第337頁。

⑦⑩同註④②，第271頁。

⑦⑪同註①⑦，第305頁。

⑦⑫同註③⑧。

⑦⑬《扶桑略記》，一條天皇上，寬和二年七月條。

⑦⑭同註③⑧，寬和二年八月條。

⑦⑮《小右記》，永延元年正月條。

⑦⑯同註③⑤，永延元年二月條。

⑦⑰同註③⑤，永延元年二月條。

⑦⑱同註③⑤，永延元年正月條。

⑦⑲《御堂閔白記》，寬仁二年正月條。

⑦⑳同註②①。

⑦㉑同註③⑧。

⑦㉒《大日本佛教全書·東大寺叢書第一》「東大寺別當次第」(名著普及會，1980年)第427頁。

⑦㉓《大日本佛教全書·塵添瑤囊

日本の平安末期における「入宋僧」裔然の入宋の事蹟

第十七、「裔然上人入唐事」、名著普及会、  
1983年、419頁。

鈔》150冊，卷第十七「裔然上人  
入唐事」（名著普及會，1983年）  
第419頁。

⑨4上掲註⑩、図26。

⑨4同註⑩，圖26。

⑨5上掲註⑩、図26、119頁。

⑨5同註⑩，圖26，第119頁。

⑨6上掲註⑩、94頁。

⑨6同註⑩，第94頁。

⑨7上掲註⑩、120頁。

⑨7同註⑩，第120頁。

⑨8上掲註⑩、121頁。

⑨8同註⑩，第121頁。